
探求部の冒険者な日常

シェイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探求部の冒険者な日常

【Nコード】

N9410S

【作者名】

シェイド

【あらすじ】

L Vと職業^{クラス}によって人々が存在意義を見出す世界“バゼラート”。少年少女の憧れである冒険者を育成するこの学園に入学してきた、結構強めな黒髪の少年の物語。

001 この世界、“バゼラート”

さまざまな種族が共存する世界“バゼラート”において、もっとも大きな大陸“オルゼーシア”

その“オルゼーシア”の大地には、まだまだ謎に包まれた悠久の自然が多く存在した。

人々はそれらを“フィールド”と呼び、

勇敢にもその自然に立ち向かう者たちを“冒険者”と讃えた。

“冒険者”はいっしか少年少女の憧れの職業となり、

技量が足りず死んでいった若者の数は知れなかった……。

“オルゼーシア”に点在するそれぞれの国は少年少女が激減する状況に耐えかね、

夢見る少年少女のために冒険者養成の学園を作った。

これでこれからの若者の命は安泰だろう。

人々はそう思ったが、悠久の自然“フィールド”……その脅威は学園程度で解消されるものではなかったのだ。

そして、有る無しに関わらず消え逝く少年少女の命に、学園の存在意義は薄れていった……。

時が流れること数十年。

各地の神職者が未知なる力、“職業”^{クラス}を発見したときから、またも歴史は動き出す。

人々は“力”や“素早さ”といった資質で自分に合った“職業”^{クラス}を見極めることを始め、

数人の若者たちは、息の合う者同士で徒党を組み、“フィールド”に挑むようになった。

そしてそれは功を奏し、神職者はその若者たちを一心同体・・・^{パー}
Tとして讃え、

学園もその勢力を盛り返し神職者と提携、“職業”^{クラス}の専門授業、P
T結成を奨励し、“フィールド”で命潰える若者の数は激減した。

そしてまた、“冒険者”は日の目を見る憧れの職業として返り咲く。

今、LVと職業^{クラス}によって人々が存在意義を示すこの世界“バゼラー
ト”で、また新たな冒険者の卵たちが学園の門をくぐる・・・。

002 探求部の日常（前書き）

用語集をちよろつと。

HP・・・いわずとした、体力

MP・・・これもよく知られる、魔法の体力

STR・・・腕力、攻撃力に影響

DEX・・・器用さ。命中率や回避率などに影響

AGI・・・素早さ。スピードやジャンプ力など、身体能力に影響

VIT・・・体力、防御力、スタミナに影響

INT・・・知力。攻撃魔法の威力などに影響

WIS・・・精神力。魔法防御力や回復魔法の威力に影響

LUK・・・運。確率魔法などに影響

002 探求部の日常

バゼラート歴1208年04月04日・・・

私立インクアイリ学園。

大陸有数の超名門冒険者養成学校である。

12歳から18歳の少年少女が一堂に帰して学ぶ学び舎ともなるので、もちろん敷地は広い。

直径5kmにもなる円を描いたような敷地を有する学園で、東西南北に各一つずつ正確に設置された校門のため、“巨大な方位磁針”とも呼ばれている。

学園内部は、南に生徒が実技授業や一騎打ちをするのにも使う広大な校庭。

東に全校生徒を収容できる全寮制学園ならではの学生寮。

西に各HRを行う普通教室を集めた普通教室棟。

北に特別授業や職業別授業クラスを行うための特別教室棟。

そして中央には職員室や理事長室、国からの視察を招くための応接室などを集めた職員棟がある。

北西にはバトルボールや武闘祭を行うコロセウムがあったりもするのだが。

> i 2 4 2 6 9 — 3 1 9 4 <

・・・とにかくデカイ。

そして、もちろんこの学園が物語の舞台なのだが、その真の主軸となるのは・・・職員棟。

主人公は決して先生などではない。学生である。にも関わらず物語の主軸が職員棟である理由、それは、“探求部”の部室が応接室だからであった。

なぜか、は、物語を進めていくうちに分かるだろう。

探求部・・・それは“フィールド”に散らばる沢山の財宝や名声を得るべく、他者の頼みを聞くという名目で冒険を楽しむ我らの部活動だ。

俺はこの部活に生きる意味っつか・・・生きがいを感じている。

だってやっぱりさあ、人生って冒険してナンボだろ？

b y ユーヤ・ミナモト

放課後・・・今日は依頼がなく、各々がのんびりと応接室で過ごしていた。

なんと言っても、この革張りのソファが心地良い・・・本当に俺達が使っているのか？ と最初のうちは思ったものだけれど・・・。

まあ慣れだよ慣れ。

俺はソファに横になり、天井を見上げて過ごす。

少し伸びてきた黒い前髪がうざったく、払う。

・・・そういえば紹介がまだだったな。

俺はこの探求部の部長をやってる、人間のユーヤ・ミナモトだ。^{ヒューマン}

黒髪黒瞳、この世界ではかなり珍しい色の髪と目が特徴だから、よろしくな。

シャンデリアの輝きが目に眩しい。

ふとシャンデリアから目を逸らし、応接室の最奥を見た。

大きなテーブル越しに、革張りの社長チェア。その向こうには、青空が眺められる。

一面をガラス張りにしており、部屋が南を向いているため日光の差し具合がちょうど良かった。

そして何より校庭を一望することができるこの場所は、特等席を手に入れたような錯覚に陥る。

ドワーフの少年たちが総合格闘をしている姿が見えるが、課外授業だろうか・・・？

「ユーヤ・・・何をじろじろと見ているのかしら？」

「別にお前見てたわけじゃない」

そうだった。ソファに寝そべりながら窓の外を見るということは、あのテーブル越しにある社長チェアを貫通視していたことになる・
・否、社長チェアに踏ん返り返っているお嬢様を貫通視していたことになるんだよなあ。

探求部部員、セレスティア天使族のリーフィアである。

白髪赤瞳、背中に生える白い翼を引き立たせるような黒のゴスロリ
ファッション……。

「いくらわたくしが美しいからといって、見惚れる必要はないので
はありませんこと?」

「どんな誤解だバカたれが」

まあ確かに美しくはあるのだが、と内心では思いつつ、社長チェア
ーをクルリと回し腕を組んで俺に正対して見つめてくる彼女に向か
って、ため息を一つ。

もちろん寝っ転がりながら。

すると俺の転がっているソファの上から声がした。

「なあ、そんなダラダラしてんだったらイッチョ付き合えや」

声のしたほう……最初のようにシャンデリアを眺めていた体勢を
とると、シャンデリアと俺の間に、金色の瞳と褐色の肌、赤い髪を

持つかいかにも野蛮そうな青年の顔が入っていた。

探求部部員、リザードマン半竜人のクウガである。

リザードマン半竜人は戦闘モードに入ると鱗に覆われた竜人化をするが、それ以外ヒューマンの時はあまり人間と変わらない。

違いは鋭い牙くらいだろう。

「・・・何にだよ？」

「新しい技を開発したんだ。そのえじ・・・相手になってくれ」

「今餌食って言おうとしたよな！？　そうだよな！？」

「・・・まあどっちでもかわんねえだろ？」

当たり前・・・むしろ呆れたような表情でそう言ってくるクウガ。

「いやいやいやいや！！」

いや死ぬし！！　お前とやったら俺死ぬし！！

ちなみに言っておくと、コイツのSTR（腕力）値は学園でも最高クラスである。

慌ててソファを転がり脱出を試みる・・・が、首根っこを掴まれ宙ぶらりんにされてしまう。

「ええい離せ！！痛いのは嫌だ！！」

空中に浮いたまま、じたばたと抵抗を試みる。

「ユーヤってホント、子どもですわねえ。でも身長は伸びたのかしら？」

リーフィアが首を傾げて聞いてくる。まあ確かに、出会ったころはそう身長変わらなかったからな。

今では俺のほうが頭一つ分デカイ。・・・まあ、クウガはその俺より頭一つデカイ気がするが。

「っつーか子どもってなんだし！」

「それについては同感だ」

「お前ら！　なに共感し合ってんだよ！！」

しみじみと頷くクウガにツツコむ。

クウガの力には敵うわけが無いと内心諦めながらも、じたばた抵抗を続ける。

「ハッハッハ、熱い男にそのような小さい抵抗など無駄だ！」

誇らしげに言うクウガ。うぜえクソ！

ハタから見たらかなりシユールな絵面だろう。

すると、応接室の扉が勢い良く開き、見慣れた猫耳少女が入ってきて

た。

その様子に、俺を拘束していた二人組も意識を逸らす。

た、助かったあゝ・・・。

彼女はヒラヒラと紙切れと尻尾を振りながら、さも楽しそうにスキップでこちらに来る。

「先輩！依頼ですよ！・・・何してるんですか？」

俺らの状況を見てそう思うのはけだし当然だろう。

人差し指を頬にあて、首を傾げるしぐさはとても愛らしい。つい 뒤에後ろでくゆる尻尾も愛らしい。

対して、首根っこ掴まれて宙ぶらりんの俺・・・。

「ところで、何の依頼なんだ？」

片手で俺を掴みつつ、もう片手の指をバキボキ鳴らしながら満面の笑みで問うクウガ。

「もう迷子の猫ちゃん探しなんかはゴメンですわよ？」

手をパタパタとしながら、遠慮を示すリーフィア。

そんな二人の様子にため息を吐き、一応新入りである彼女・・・探求部部長、獣人族^{フェルト}のシェリルは紙切れ・・・依頼用紙を読み始める。

「アシッドワイバーン3頭の討伐依頼です」

「おお！いいねいいね！！」

戦闘狂のクウガは、ワイバーンと聞いてテンション上がりまくっている。

「・・・フィールドは？」

未だ首根っこを掴まれたまま、俺が問うと、シェリルはにこやかに返してくれた。

「はい、“モールスの森と丘”、ワープゾーンを使えばすぐに到着できます！」

バタン！！

「もう申請は済ませたよ。準備が出来次第行くからね」

シェリルが時間を言ったと同時に、俺がもっとも長い付き合いをしている少女が応接室へと入ってきた。

耳がとがっていること、それが特徴の探求部副部長。

エルフ族の金髪^{ブロード}美少女、アーシェだ。

カツカツと俺たちの前を通り過ぎながら、満面の笑みで俺に（・・・）言う。

「久々の冒険依頼、頑張ろうねユーヤ！」

「なんでユーヤだけだよ？」

クウガのツツコミはもつとも。まあいつもこうだしな・・・。

そんなことはおかまいなしに、アーシェは応接室左側にある武器置き場から自分の杖を持ち出し言った。

「ほら、さっさと行こう！ 探求部、始動だよ！」

『おう！』

俺達もそれぞれ武器を取り出し、彼女のあとに続いていく。

やっぱり最初の一文訂正！

今日も我らが探求部は依頼を受理し、遂行中だ！

002 探求部の日常（後書き）

次回から、本編。

主人公が私立インクアイリ学園に入学する前の話から、この仲間たちとの出会いの章を書き始めます！

ちなみに探求部メンバーのLVとクラスは意図的に伏せましたので悪しからず。

出会ったときに、ということでは！

・・・つか挿絵デケえ。

003 俺のスタート

俺は小さいころ集落を飛び出し、親父とともにオルゼーシア大陸に存在する沢山のフィールドを旅してきた。

北は雪山、雪原、永久凍土、タイガ針葉樹林。

西は溪流、火山、山岳地帯、沼地。

東は密林、ジャングル、樹海、海岸。

南は砂漠、孤島、河川、海底洞窟。

そして中央は街道、森と丘、草原、荒地……。

6歳でクラスチェンジ転職した日に親父とともにあの腐った集落を飛び出して、本当に様々な経験をしてきた。

そして……12歳になったある日。

バゼラート暦1206年04月04日……

「今まで多くの経験をお前には植え付けてきた。それはこれからもお前を助けてくれるだろう。この先に私立インクアイリ学園という、冒険者養成学校がある。お前はそこに行き、俺との旅で学び得なかったものを身につけるんだ」

「学校・・・？ 親父は？」

夜、焚き火を囲みながら、俺と親父は語る。もっとも、俺は食い終わっていない串焼きの肉を咥えながらだが。

親父はニカッと笑って言った。

「俺か？ 俺はな、これから迷宮を回る。まだLVを手にしていないお前を連れてでは少々厳しいからな。お前が成長して一人前になったら、また旅しような」

「じゃあ、一回別れるってことか？」

黒髪を短髪にまとめ、若干あごひげが目立つ親父は、この世でも有数の冒険者らしい。

このアホ面を拝む限りはそんなこと到底思えないのだが。

「・・・お前今、失礼なこと考えてなかったか？」

「いや全く。」

親父は俺の答えを聞くと、ため息を一つ吐いた。俺は残った肉を平らげる。

「とにかくな、お前とは一度お別れだ。ここから学園に行くまでにある“フィールド”には、お前が驚くほどのザコしか居ないから安心しろ。油断？ そんなもので強者の実力は揺るがない」

胸を張って親父が嘯く。が、それはアンタの論理であって、俺には適用されねえよ。

「じゃあ、明日お前が起きたときにはもう居ないからな？ 学園生活、楽しめよ？」

急な発案、それも拒否権利のないものではあったが、特に抵抗はなかった。

この親父、見た目はこれでも言うこと成すこと大概俺の身になるとばかりだからだ。

それに・・・寂しさなんてものは微塵も感じなかった。どうせこの親父とはまたいくらかでも出会う。

そんな気がしていたからだった。

「分かった。学園で親父以上のことを学べるとは思えねえけどな・・・」

「ハハ、嬉しいこと言ってくれるじゃねえか」

親父は高らかに笑う。座っていた切り株が悲鳴を上げそうなほど豪快に拳で殴り、ソレを俺の前へと突き出した。

「別れだ。また会おうな、史上最年少の精錬術師」
リファイナー

俺も自分の座っていた丸太を殴り、その拳をコッソリと親父のソレに当てた。

「おう。まあ、もう既にそうじゃねえかも知れねえけどな」

翌日、目が覚めると親父の姿は無かった。

その代わりに俺が眠っていた腹の上には、二枚の封筒が乗っかって
いた。

「なんだ？」

寝ぼけ眼をこすりながら、二枚の封筒を手取る。

一枚には、「ユーヤへ」二枚目には、「学園長へ」と書いてあった。

二枚目のほうはどうやら俺の紹介状らしく、良質の紙が使われていた。

俺宛である一枚目の封を乱暴に破ると、その中には一枚の手紙が。

破った封筒をその場に捨て、丁寧に三つ折りにされた紙を広げて読み始めた。

『

おはよう。お前も目が覚めたのか。

とりあえず、これからしばらくお前に会うことはないだろう。

今までお前には、学園に入れるための訓練をしてきたつもりだったんだ。

フィールド巡りの旅もそう。モンスターたちを倒したこともそう。

もっと言えば、あの日外の世界の存在を知らせたのもこのためだったりする（笑）』

（笑）じゃねえよ。と心の中でツッコむ。

『

とにかくだ。お前はこれからその学園で立派な冒険者になれ。

その学園にはお前よりいろんな意味で強い奴らがたくさんいる。

きっと、楽しいぞ。

これと同じところにもう一枚、紹介状を置いたんだが、あるか？

まさか封は開けてねえよな？

それを持って学園に入学しろ。ちょうど入学シーズンだ。』

親父、入学シーズンに合わせて旅してたのか・・・。

『

俺はな。あの集落で息子が一生を終えるのが悔しくて堪らなかったんだ。

だから学園を使って、いろんなことを知って欲しい。

俺はあそこで学んだんだ。お前にも絶対合うはず。

黒髪黒瞳は俺らの象徴ではあるが、別に差別されたりはしない。

逆に精錬術師^{リファイナー}として、かなり優遇されるかもな。

そんなことだから、楽しんでくれや。お前の幸せは、俺と死んだ母さんが一番願ってるからな。

アホな親父より バカ息子へ希望を込めて』

「・・・ふう」

読み終えた俺は一度、ため息を吐いた。

俺の頼れる親父は、想像していた以上に、俺のことを思ってくれてたんだな。

空を仰いで、俺は呟いた。

「ああ、精一杯楽しむさ」

荷物、といっても皮袋だけだが、それを肩から引っ提げて、俺も歩き出した。

野宿の事後処理は全て、親父がやってくれていたらしい。

ご丁寧に進むための方向に矢印を書き残していったらしく、地面には消えなかった西への鏝^{やじり}が見える。

「ここまでして行かせたいほど、親父は学園が楽しかったんだろかな・・・」

苦笑しながら、俺は道を真っ直ぐ西へと進む。すると、ピクニックに来たらさぞ気持ちよからう森が眼前に現われた。

その前には立て看板がしてあり、こう書いてあった。

『リラ森林』

・・・おいおい、こんな可愛らしいフィールド初めて見たぞ。

通常、フィールドの入り口にはこのような看板がしてある。

そしてその中は迷宮よろしくの迷路染みた道になっているのだが、こんな見るからに難易度Eは初めてだ。

まあ親父との旅だったからな、仕方ないかもしれない。

俺を鍛えるとか言って、6歳のころから容赦なかったから・・・こんな生易しいところには来たことが無い。

『ここから学園に行くまでには、お前が驚くほどのザコしか居ないから安心しろ。油断？ そんなもので強者の実力は揺るがない』

ふと親父の言葉を思い出す。

あの（・・・）親父が言うからハードル高く感じたのだろうか？

確かにこんな森なら俺でも平気かもしれないな・・・。

そう思いつつ、俺はリラ森林へと踏み出した。

「あるえ・・・？」

俺と同じ年くらいの連中が、ランクG・・・最も弱いレベルとされるモンスターを相手取って必死に戦っていた。

一つ目兎の“ラビット”だの、ネズミの“ラット”だの・・・。

つか・・・同じ年くらいの連中も弱え・・・。

察するにここは学園に通いたい生徒の試練の間となっているみたいだな。

だが、こんな実力で入れるのか？ 学園……。

剣を振るう腕もぶれていたり、火属性呪文も、なんだか見て居た堪れなくなるような火がシュポッと出るだけ。

こんな戦闘に巻き込まれるのも嫌なので、俺はさっさと学園に向けて歩き出すことにした。

さっさか足を進めながら、思案に暮れた。

むう……これが一般レベルなのだろうか？

俺が異常なのだろうか？

ぶっちゃけ俺なら秒殺できるしなあ。

親父の言うとおり、こんな場所では油断なんかで強者の立場は揺るがない……。

歩くこと数時間。

モンスターにも知性があり、本能で強者には警戒する。自分が勝てると思ったか、好戦的か、それか進退窮まった時にしか戦ってはこない。

ということで、やっぱり俺という存在はここでは強者らしく、寄ってくる敵はほとんどいない。

最後に戦ったのは、フルメタルハガーだったか。

あ、ちなみにフルメタルハガーってのは小さな家一件分くらいの大
きさで、鋼鉄の体をしたアリだ。

目からビーム！とか平気でやってくるから死ぬかと思ったし。

ちなみにフルメタルハガーの実力はランクA・・・軍の一個小隊を
派遣して討伐するレベルだ。

・・・さて、そんなことは良い。

だんだんこの森も深くなってきて、少し雰囲気グロッキーしてきた。
いや違う、森が深くなってきたから空気が痛いわけじゃないな、こ
れは。

入り口付近でラットだのラビットだのと必死に戦っていた連中など、
相手にならないほどの敵が居る可能性がある。

俺は集中力を高め、臨戦態勢を取った。

いつ敵が出てきてもいいように。

皮袋からいつでも素材を出せる状態にして森の中を進む。

まだまだ日は高く、木漏れ日が身に心地良い。そこまで鬱葱として
いるわけではなく、道も歩きやすく険阻ではない。

大きな木が俺の前に現われた。千年樹、とまではいれないが、かな
りの樹齢を重ねているだろうこの樹。

しばらく感嘆の息を洩らしていた。

「この樹は・・・生きてるって感じるなあ」

そして俺が樹に近づいたその時。

「・・・ファイアークラッカー！」

・・・！？

樹の裏で、魔法を唱える声が聞こえた。それもかなり焦った声で。

何が起こっているのだろうか。それもファイアークラッカーといえば中級魔法。

なかなかの魔法使いが切羽詰まっていることになる。

慌てて俺が樹の裏へと行くと、エルフの少女がデスベアーと交戦中であつた。

何故ここに召喚獣が！？

デスベアーは、召喚士系クラスが召喚できるモンスターで、一般には棲息していない。

当然こんなアホみたいに平和なフィールドに居ていいモンスターではない。

召喚士と魔法使いが交戦中なのか・・・？

だが召喚士の姿は見えない。

「つく！」

デスベアーの鋭い爪による右フックを、エルフの少女はバックジャンプで避ける。

・・・つーことは、彼女は狙われているのか？

「fire medium grade second ファイアーインパクト！」

突如彼女のかざした掌から直線状に炎が放たれ、デスベアーへと突き進む。

だが寸でのところで飛び上がってかわされ、お返しとばかりに空中から突進が来る。

「ツツ、water medium grade fourth
アイスバリアー！」

デスベアーと少女の間に、分厚い氷の板が出現した。

「ギャワ！？」

一瞬のうちに現われたソレに対処することが叶わず召喚獣は激突する。

・・・それにしても、あんなに連発して魔法、それも中級魔法を次

々と放てるとは。あの女の子凄いな。

木陰で様子を窺っていた俺は、驚嘆の吐息を漏らす。

さて。

周りを見回してみるものの、どうやら誰も来そうになし。おまけに召喚主であろう人の姿もないとなれば・・・ピンチになってる少女を救うしかないよな。

「加勢する！」

さっと少女の前に降り立つと、少女は驚いた顔をして、ソレを段々怒りへと染めていく。

「危ないって！ コイツ強いのよ！？」

「知ってる。今まで様子見てたし」

「だったら・・・！ まあいいわ。これでどうせ終わり！」

少女は俺の前に立つと、デスベアーに向けて手をかざした。

「wind hard grade third ブラスト！！」

「うお！？ 上級魔法か！」

一瞬のタイムラグを経て、デスベアーを中心に竜巻が巻き起こる。

だが。

「グボアアア！」

気合を入れた叫びとともに、ヤツはそれを両手で弾いた。

「!?!? 嘘!?!」

驚くのも無理はない。上級魔法を弾くってことは、よほど術者より上位か、魔法に耐性があるかのいずれか……。もしくは両方。

だが、この少女は見る限りかなりのINT（知力）値を持っている。弾かれるほど弱くない。

だとすると……

「かなり上位の奴が出したか、魔法に強いのか……。まあいいや。こっからは俺がやるよ」

「あ、アンタ死にたいの!?!」

「任せとけて!」

俺は皮袋から鉱石を二つ取り出す。ドラゴンルビーと鉄鉱石。皮袋を捨て、片手に一つずつ持ち、目を閉じる。

「な、何する気!?! アイツ来るわよ!?!」

エルフの少女が言うとおりに、デスベアーは標的を俺に変えて突進してくる。

「リファイン
精製」

俺の手元にあったドラゴンルビーと鉄鉱石が、ルビー色と灰色の球体となり、宙に浮く。

「クラフティング
練成」

両手を近づけていく。すると、途中で球体同士が合わさった。

そのまとまった混沌カオスを、両手で包み込む。俺は目を見開き、言った。

「精錬・フレイムブレード」

刀身がドラゴンルビーでできた剣が、俺が手を広げるとともに姿を現す。

それを右手で掴み、デスベアーへと向かう。

「ガアア！」

右フックで襲ってくるが、それごとまとめて斬り付ける。

「消えろ！」

炎を纏った俺の剣は、獲物の肩口から対の横っ腹まで鋭く風ぐ。デスベアー

一瞬で、崩れ落ちるデスベアー。

この剣には、火属性とSTR（腕力）増加の効果があるため、一撃で片付いた。無論、これ自体の攻撃力もかなり高い。

ズシーン、と音を立てて倒れるヤツを尻目に、エルフの少女に向き直る。

「な、なんなのよアンタ・・・」

驚きを隠せないような少女に俺は微笑み、言った。

「ただの精錬リファイン術師さ」

ちよろっと、かっこつけすぎたか？

と心の中で苦笑した。

004 主席狙いのアーシェ

「……精錬術師？」
リファイニスト

エルフの少女は息を整えながら俺に向かって問いかけてくる。

改めて容姿を確認してみると、まずしなやかに肩甲骨辺りまで伸びた金髪。ブロードエメラルド、という例えが一番しっくりくる瞳。エルフ特有の横に尖った耳。

そして服装は魔導士よりも魔女に近い。太腿とか見えてるし、ローブというより緑色のマントを羽織っている。

そして、手には杖。それも只の木製ではなく、俺が東の樹海で見つけたような、魔力を秘めた樹を使っているようだ。

身長は俺より拳一つ低いくらい、か？ちなみに俺は152Cmな。チビとか言うな。12歳だぜ？それでも。

俺は、召喚獣特有の、霧散して消えてゆく屍骸デスベアーを尻目に答えた。

「ああ。それが俺の職業だ」
クラス

「聞いた事ないかも……」

彼女は杖を見る限り、魔法使い系の職業クラスだろうか？

俺の言ったことが飲み込めなかったのか、しばし考えるそぶりを見せていた彼女は、俺のほうを向いて言った。

「あ、あのさ、助けてくれてありがとう。私はアーシェ・クラルヴ
アインよ。」

頬を掻きながら視線を逸らしてそういう彼女。どうやら照れている
らしい。

「俺はユーヤ・ミナモト。よろしく」

彼女にそう言って握手を求めると、顔を背けたまま応じてくれた。
さて、本題に移るか。

「なあ、おかしいと思わないか？」

「・・・私も思ってた」

ふと、俺のほうを向くアーシェ。

おかしいというのは、こんな森に召喚獣が出たことだ。

召喚獣が出た以上、この近くに召喚士系の職業^{クラス}が居ることになる。

「でも、私の結界の中には居ないみたい・・・」

「結界!？」

結界というのは、どんなものであろうと上級クラスでないと使えな
いはずだが・・・?

「アーシェ、キミ、職業は？」

「？ 私の職業はソーサラー。結果くらいならどうってこと無いわ」

彼女は肩にかかる髪を払いながらそう言う。

ソーサラー。それは通常魔法に関してはスペシャリストだ。攻撃魔法も回復魔法も扱え、MPとINT（知力）、WIS（精神）がかなり高値でないと成れない職業クラスだった気がする。

彼女は彼女で、何者？ 俺も旅の途中は「何者だよお前」ってよく言われたものだが。

親父も俺も精錬術師だったから、他の職業クラスの人間に会うのは久しぶりだ。

「さて、そろそろ行かないか？」

俺が切り出すと、素直に頷いてくれた。

「そうね、早く寮に行きたいわ」

「寮？ アーシェってさ、もしかして学園生？」

「今年からね。ユーヤもそうでしょ？」

良かった。寮とか言うからもう先輩かと思った。

人知れずほっと胸をなでおろす。

「ああ。でも、もう寮に？」

「？　そうよ。なに？　まだ入学受付出してないの？」

初めてのものを見るような目で見られ、あまり気持ちの良いものではない。

「まあな。とりあえず、学園に行くのが最優先かな」

「？　私もそろそろ疲れたし、一緒に行くわ」

どうやらもう出口付近だったらしく、すぐに出ることができた。

アーシェはレベル上げのため、このフィールドに出向いていたらしい。

そして、森を抜けた俺の目の前には、巨大な城塞が広がっているように見えた。

岩を積み上げて作られたような外壁に、厳かながらも、俺の二倍くらいの高さがあるかという門。

私立インクアイリ学園の校門が、そこにはあった。

アーシェは小さなカードを取り出し、門の中央にある台座にかざした。

すると、重く寂れた音を立てつつ、学園の門は開く。

そしてその向こうにあったのは・・・

「んだこりゃ・・・フィールド？」

「バカね、これが学園。私立インクアイリ学園よ」

悠久の自然の一つに入りそうな雰囲気だった。

門の向こうに見えたのは、真っ直ぐ続く街道、中央にある噴水の広場。

周りは草原。ベンチがところどころに置いてあり、木々もそう、い
ろんなところに生えていた。

あそこで昼寝をするのは気持ち良さそうだ。

俺はアーシェの先導で学園内を進む。もっともまだ、ここが学園だ
とは思えないが。

噴水広場は交差点の役割も果たしているらしく、こちらから進めば
右手に建物、左手に建物、正面にも建物・・・あり？

「なあ、なんで同じ建物ばかり？」

「ユーヤは知らなかったわね。ここは学生寮のある東エリア。東門
から入ってきたからね」

当然のように、歩きながら振り向いて答えてくるアーシェの言葉に、
正直驚いた。

こんだけの広さがあって、まだ東エリアのみ？

つまり、この建物全部が学生寮ってことか？

少なく見積もっても、一つの建物には10階以上の高さがあるだろう。

窓の数が横一列だけで20以上あることから、10部屋は優にあるはずだ。

ってえと・・・オイオイ、一つの建物に確実に100人は収容か。いや、1部屋何人かも分からねえし・・・。

「なあに考え事してるのよ、ほら、行くわよ」

「ちょっと待って。俺とりあえず紹介状出さなきゃいけないんだけど」

「紹介状・・・？」

俺が懷から出した封筒をピラピラ振ると、アーシェは訝しげに元来た道に戻り俺のところまで帰ってきた。

そして俺がその紹介状を手渡すと、表と裏を交互に眺め、頷いて俺に返す。

「受付どころか手続きもまだなわけね。じゃあ職員棟に行きましよう。それにしても、学園長に紹介状なんてね・・・」

アーシェ曰く、普通は入学試験を受けてかつリラ森林を抜けてこないと入学はできないらしい。

大丈夫なのか？ この紹介状で・・・。

右も左も分からないので、とりあえず着いていく。

噴水広場を真っ直ぐ抜け、真ん中にあった寮の横を通る。

ふいに、アーシェが俺の横に並んで歩き出した。

「後はここを真っ直ぐ行くだけだから。・・・あのさ、私もそこそこ冒険の場数は積んできたつもりだけど、リファイニスト精錬術師なんて聞いた事ないんだよね」

「ああ、そのことか。それならアーシェの年でソーサラーってのもすごいと思うけど」

クラス職業は基本、実力とともにランクアップしていく。

ランクアップするには神殿の力が必要にはなるが、それは本人の実力が伴って、ということだ。

そのランクアップは別称、クラスチェンジ転職とも呼ばれ、その職業になるための基本パラメータを満たしていなければならぬ。

ちなみに職業は最大5段階あり、ソーサラーは魔法使い系の4段階目。

普通は学園に通うような人間が・・・エルフか。エルフが取れるような職業ではない。

凄まじい量のINT（知力）とWIS（精神）、MPが必要になるため、正直娑婆シヤバにもさらにはいない。

それはそうと、アーシェは人差し指を立てて俺に言ってきた。

「私はね、この学園で主席を取ろうと思ってきたのよ。だからこのくらいは当たり前。それより、精錬術師^{リファイニスト}って職業^{クラス}について教えてよ」

少し影が感じられたが、気にしないことにした。誰だって知られたくないことはあるさ。

「精錬術師^{リファイニスト}の特徴としてはまず、ランクは存在しない」

「！ それって転職^{クラスチェンジ}しないってこと？」

「そう。んで精錬術師^{リファイニスト}について詳しく説明すると、まず素材がないと何も出来ない」

「さっき使ってたドラゴンルビーと鉄鉱石みたいな？」

首を傾げるアーシェに頷いてから、俺は続けた。

「精錬術師^{リファイニスト}は、その素材をまず“精製”^{リファイン}する。するとそれは球体状の純物質となる。これが第一段階」

「ああ、さっきやってたやつか。結構綺麗な色だったね。」

「それはどうも。続いて第二段階だ。その物質を一つそのまま作り変えることも出来れば、複数の物質を合成することもできる。それを“練成”^{クラフティング}と呼ぶ」

「さっき手を合わせてた、あれか」

手をポン、と叩いて納得するアーシェ。

「そして最後に、精錬された新たな物体を創り出す。それが精錬術^{リファイン}師だ^{スト}」

「なるほどね・・・失敗とかしないの？」

恐る恐るといった具合で聞いてくるアーシェの上目遣いが結構カワイイ。

「するよ」

「!？」

目を見開く彼女に、そのまま説明を施す。

「MPとINT（知力）、それからAGI（敏捷性）^{リファイン}が低い奴はよく失敗するらしい。・・・もつとも精錬術師^{クラス}の職業になれる人間はそこまで酷くはないけれども」

「ヒューマン人間？」

「そう人間^{ヒューマン}。っていうか、これね」

「？」

俺が、自分の瞳と髪を指差すけれど、アーシェは意味が分からなかったようだ。

人間といったときに疑問が浮かんだらしい。

「この職業、^{クラス}この黒髪と黒瞳を持つ人間^{ヒューマン}しかなることが出来ないんだ」

「そっか。だから私も知らなかったのね・・・あ、そういえばさっきの武器、どうしたの？」

「ああアレ？ 精錬武器は魔法と一緒に。一定時間・・・というか一度の戦闘で霧散するんだ」

「ふうん・・・え！？ じゃああのドラゴンルビーは！？」

「霧散した」

「ええええええ！？ ナニソレ超もったいないじゃん！！」

俺がこともなげに言うところアーシェは酷く驚いたようだった。

まあ仕方のないことかも知れない。ドラゴンルビーは、貴金属。しかもかなりの高級品だ。

「だから言っただろ？ ^{リファイニスト}精錬術師は素材が命だって。幸い俺はたくさん^{リファイニスト}のフィールドを旅してきた。だから素材もいろいろなところから取ってきて、ほとんどの素材が腐るほど余ってる。だからそこまで問題は無いんだけどね。行ったことないのは・・・迷宮くらいだ」

「！！？？ め、迷宮って・・・いやまあサスガにそうだろうけど。他は全部行ったんだ？ 凄いわねユーヤ・・・」

迷宮。親父が行くと言った場所。

未だ解明されていない、別名“神の試練”。親父はそこをめぐると言っていた。

・・・でもま、あの親父ならやり遂げちまいそうな気がしないでもないんだよな。

「なに笑ってんのよ」

「いや、親父を思い出してな」

「親父・・・？ あ、着いたわよ」

ズオオオオオ、とバックに現われそうなくらいの威容。

なんだコレ、迷宮ですか？

アーシェの案内で辿りついた職員棟とやらは、職員棟というより職員塔と言ったほうが正しいような代物だった。

004 主席狙いのアーシェ（後書き）

アーシェの職業詳細^{クラス}

回復魔法・通常攻撃魔法に優れた、万能魔法職業^{クラス}。
物理的には攻守ともに弱い、魔法に関してはスペシャリスト。

魔法使い

←

ウィザード

←

ウォーザード

←

ソーサラー↑今ココ！

←

???

005 職員棟

巨大な円柱・・・そのたとえば一番正しいんじゃないだろうか？

俺の眼前には、そんな塔が建っていた。

これが職員棟だって！？

どんだけ金つかつとんじゃこの学園は！

「南に入り口があるから、そこに向かいましょう」

「・・・おう」

南へぐると、塔の周りを行く。すると南にはなんというかもう、フィールドで見た砂漠のような広い校庭らしきものがあつた。

もう驚かねえ。絶対驚かねえ。

扉の前に辿りついた。ふと西のほう・・・さっき来た方角とは逆のほうを見ると、バカでっかい、さっきの寮が3つ集まったらあんなだろう、くらいの横幅をした建物があつた。まあ流石に低かったが。それでも5階建てくらいじゃねえか？

「なあアーシエ、アレは何？」

俺が指差した建物を見てアーシエは、当たり前のような顔をした。

「普通教室棟よ？ 私達がこれから普通に座学を受ける場所」

「デカすぎないか？ アレ」

「そう？ 全校生徒6000人が生活するんだから、これくらいが妥当じゃない？ ほら行くわよ」

6000人も居るのかぁ。わーい人がたくさんだぁ！・・・想像したくもねえな。

じゃああの寮はどうなってんだろう。あとでアーシェに聞いてみようっと。

塔の中に入ると・・・いや、塔の入り口が四角い箱になっていた。人が5、6人は入れそうだ。それを魔法で浮遊させているんな階にいくらしい。

わぁ、ハイスペックう。なんだか驚くことばかりだ。

その箱の中に入ると、いくつかボタンがあった。

アーシェが受付のボタンを押そうとしたのを制し、学園長室を押す。

するとしばらく浮遊感があった後、先ほど入ってきたのとは逆方向の扉が開く。

そしてそこは、突き当りまで広い廊下になっていた。廊下のところどころに扉もあり、職員用の様々な部屋が用意されている。

この廊下の突き当たりに、学園長室があった。・・・ここ何階だろう。

軽くノックをすると、入りたまえ、と厳かな声が響いた。

「じゃあ私は待ってるね」

「わざわざ済まなかった。俺なんかのために付き合わせて」

アーシェが一步退いてそう言ったので、俺も改めて礼を述べる。考えてみれば、無関係の俺にわざわざ案内までしてもらったからな。

すると彼女は首を振って言った。

「ううん、私も話が聞けてよかったし、何より初めての友達だから・・・」

華が咲いたような笑みに、一瞬脳に衝撃が走ったような・・・。まあいい。

「俺も初めての友達だよ。アーシェで良かった」

アーシェは顔を真っ赤にして、

「そ、そう・・・」

とか言っていた。会話が続きそうにもないので、俺は学園長室の扉を開く。

「またあとでね。」

アーシェは目を逸らしたまま、頷いた。

・・・さて、学園長室はなかなか綺麗な部屋だった。

正面にはローテーブルを囲むようにして、ソファが二つ。

そして壁には歴代の学園長だろうジジイの顔が烈火のごとく勢ぞろい。

「何か用か？」

ふと声のしたほうを見ると、部屋の奥で男が新聞を読んでいた。

親父と同じくらいの年齢だろうか？ 背中に白い翼があることから、セレスティア天使族であることが分かる。

金髪をスポーツ刈りにした、爽やかなオッサンであった。

「この学園に入学したくて来ました。親父から学園長に渡せと、紹介状が」

「紹介状？ ふむ、入学試験を受けずに入れるほどの、か・・・？」

オッサンは新聞を適当に投げ捨て・・・オイオイ。

俺のほうへと近づいてきた。

手紙を手渡すと、オッサンはその封を徐に破る。おもむろ

やっぱりこのオッサンが学園長なのか？

「オッサンが学園長なんスか？」

ゴン！

刹那の速さで殴られた。

「誰がオッサンだ誰が。・・・まさかシューヤの息子とはな。とりあえず座ろうか」

オッサンは懐かしげな顔をして俺を見た。

俺はオッサンに促され、ローテーブルを挟んで対面のソファに向き合って座った。

「さて、俺が学園長のケント・ローズベルト。よろしくな」

「はあ」

紹介状をみせてからどうも砕けた調子に変わった学園長に、少し驚く。

「俺はこの学園でアイツと親友だったからな・・・。その息子が来るとなりや、そりゃあ嬉しいさ」

・・・！ 親父の親友。このオッサンが？

「・・・お前もし又心のなかでオッサンとか言ったらガチで殺すから」

尋常じゃない殺気を当てられ、少し冷や汗が背筋を伝う。

だがそんな俺を見て、学園長はニヤリと笑った。

「へえ。こんだけ殺気を喰らって平気なのか。アイツに似て、肝が据わってんな」

親父に似てるのか、俺は。嬉しいやら悲しいやら……。

「それで、入学はいいんスか？」

「ああもちろん。アイツの紹介だし息子ってことは、リファイニスト精錬術師だろ？」

ずいぶん親父は信用されてたんだな……それに、多分親父の素性も知ってるな。

「はい。今までずっと親父と旅してきたっスから」

すると、今度は学園長、声を上げて笑った。

「ハッハッハ、そうか。アイツのことだから、鍛えるとか言ってトンでもないやつとやらせんだろ？」

「俺、この前単独でファイアードラグーンとやらされたっス……」

俺の怖ろしい過去を聞いて、学園長はまたも笑い出した。

「ハッハッハッハ……ひい、腹が痛い。だが、シューヤはそれだけお前のことを買ってたんだよ。どうせそれも、最後には倒せただろう？」

「！　まあ、そうですね」

俺よりずっと、親父のことを知っているかもしれないな。

「それにしてもアイツ、12歳のガキにファイアードラグーンとタメ張らせるなあ・・・俺でもしねえよ」

遠い目をして学園長は言った。そして、俺に向き直ると聞いてくる。

「シューヤは今どこに？」

「迷宮巡りしてくる、とか言ってたっスね・・・」

俺がそういうと、学園長はため息を吐いた。その顔は笑っていたが。

「アイツらしいな。さて、キミには学園に入ってもらおう。俺の父親・
・前学園長同様、精錬術師は特別カテゴリとして扱うからその都度いろいろ教えるさ。これから受付に行つて、生徒証をもらえ。そうすれば、LVがもらえ、能力値が具現化されるから。そして最後に、これは俺から渡しておこう」

そういつて学園長は立ち上がり、引き出しをごそごそいじくり、何かを持ってきた。

「これは、シューヤが12歳〜15歳だった時の部屋の鍵だ。お前もそれを使うと良い」

指の間から吊る下げられた鍵を手に取り、俺は眺める。

綺麗、が第一印象であつた。銀色に輝き、形状がまた美しい。

俺がしばらく眺めていると、学園長は苦笑して言った。

「頼むから“^{リファイン}精製”するなよ？ シューヤはそれをやって、一日宿無しだったことあつから」

「ハハ、気をつけます」

俺はそのまま立ち上がり、学園長室を後にした。

「・・・全く、何が紹介状だよ。お前しか知らねえ俺のトラウマ殴り書きにただけじゃねえか。・・・シューヤ、元気でやってるか？」

俺が部屋の外に出ると、アーシェは壁に寄りかかっていた。

「あ、おかえり」

「ああ。とりあえず生徒証を発行してもらったよ」

俺が言うと、アーシェは弾みをつけて俺の正面に立った。

「じゃあ、行こっか」

廊下に戻る。さっきの箱に乗り、今度は受付のボタンを押した。

またも浮遊感。俺はあんまりこれ好きじゃないな・・・。

そんなことを思っていると、扉が開く。さっきとは違い、ロビーになっているようだった。

ところどころに観葉植物や柔らかそうなソファがあり、談笑とかしたら楽しそうだな、と思う。

円形をした大きな部屋で、奥にカウンターのような場所がある。

俺とアーシェはそのまま真っ直ぐ、カウンターへと進む。

そこには、バンダナをして可愛らしい黒のメイド服を着込んだ女性が座っていた。

おばさん、とうには若すぎるし、お姉さんというのは語弊がある。だから女性。うん、良い例えだ。

「こんにちは。何か御用でしょうか？」

「あ、はい。俺の入学手続きと、生徒証の発行をお願いします」

「ちょっと待って・・・じゃあはい、これに手をかざして？」

女性を取り出したのは、吸い込まれるような色をした水晶。どんなのかな？

そう思いつつ俺はソレに手をかざす。すると横からアーシェが覗き込むように顔を出した。

「そんな覗くほどのモノなのか？」

俺が聞くと、アーシェは頬を掻く。

「そりゃあ、ユーヤの実力は気になるし・・・」

「実力？」

俺がハテナマークを浮かべると、受付の女性は微笑んで答えてくれる。

「はい。もう少ししたら貴方の名前、職業、細かい能力値が数値として現われ、そして新たにLVという概念を加えます。みんな1からのスタートになりますが、初期の能力値は人それぞれです」

「ふーん……。能力値ってどんな感じで出るんスか？」

「全ての通常値は100です。簡単に言えば、20歳までのうのと生きた男性一人の数値がオール100。1の増減で、人より1%高かったり弱かったりしますね。世界レベルで優秀な戦士クラスだと、だいたいSTR（腕力）が1500とか……。でしうか。あ、今年の入学生には最初からSTRが1100っていう化け物が居ましたね。これからが楽しみです」

……。1000%増しって何？

しかもソイツまだLV1なんだろう？

俺が困惑に陥っていると、女性は笑って答えてくれた。

「大丈夫ですよ。この学園にはその子より強い人も居ま……。あー、いないかも」

はい大丈夫じゃありませんね。チート野郎ですね？ 分かります。

「あ、出てきたんじゃない？」

アーシェが言うと、なるほど確かにだんだんと、数値らしきものが現われる。水面のようにゆらゆらとしているが、それは次第に固まっていた。

「みたいだな……」

『

ユーヤ・ミナモト 12歳 リファイニスト 精錬術師 LV1

128 HP (体力)
789 MP (魔力)
108 STR (腕力)
403 DEX (器用さ)
102 VIT (防御力)
408 AGI (敏捷性)
960 INT (知力)
108 WIS (精神)
578 LUK (運)

』

「どう考えても、12歳の少年の数値ではありませんね……。これは一人前の冒険者がLVを積んで、やっとの数字ですよ?」

「ユーヤも充分すごいじゃない……」

二人に奇異の視線で見られ、正直あまり気持ちのいいものではない。

「じゃあ普通の数値ってどんなのっスか?」

少々俺が唇を尖らせて言うと、女性は笑って一つの生徒証を出した。

「これが一般平均の学生ね」

『

○○○・○○○ 12歳 魔法使い (ウィザード) LV1

51 HP (体力)

201 MP（魔力）
41 STR（腕力）
100 DEX（器用さ）
63 VIT（防御力）
33 AGI（敏捷性）
120 INT（知力）
123 WIS（精神）
39 LUK（運）

』

「・・・そうですか」

もはや何も言うまい。確かに俺もチート野郎かも知れない。でもSTR1100よりは遥かにおとなしいチート野郎じゃないか？

俺は魔法は使えないからWIS（精神）は関係ないし、力も必要ない。

リファイン “精製”に必要なDEX（器用さ）と、クラフティング “練成”に必要なLUK（運）、そして精錬全てに必要なINT（知力）とAGI（敏捷性）そしてMP（魔力）が高いが、その他STRやVIT、HPといった数値は高くないしな。

「それにしても、リファイニスト 精錬術師なんてシューや先輩以来じゃないかな？」

「先輩？」

女性の言葉に、俺は反応した。すると女性は頷いて答える。

「そうよ。私の5個上の先輩。有名だったし、カッコよかったなあ」

夢見る少女のような瞳をする女性に、俺はため息を吐いた。

「それ、親父っス」

「ええ！？　すごい縁ね・・・ユーヤ・ミナモトか。本当だ。うん、貴方のことはしっかり覚えておくわ。憧れの先輩の息子ですもの」

「はあ、よろしくっス」

「・・・さて、生徒証も出来たし、入学手続きは向こうで終わったわ。はい、じゃあこれで貴方もこの学校の生徒よ？・・・入学式は、明後日ね。それまでは学園内を覚えたり、寮でのんびり過ごすといいわ」

俺は手渡された透き通るようなカードを見る。・・・いつ撮ったのか、俺の写真まで載っていた。

「ああそうそう、寮の鍵はもらってる？」

「はい、学園長から親父の部屋を」

「シューヤ先輩の！？　いいなあ・・・分かったわ。あとは何も無いわね。・・・じゃあ、またおいでね。貴方といいSTR1100の彼といい・・・そしてアーシェさんのソーサラーといい、すごい逸材ばかりね、今年は」

そう言う女性の顔は、とても楽しそうだった。

006 学生寮

「じゃあこれ、学園の制服ね。こっちが冬服、こっちが夏服。教材関係は初授業の日に配られると思うから・・・生徒証と制服、それからこの鞆は忘れずにね」

制服と鞆を渡された。

夏服は白のYシャツに、黒のネクタイ、黒ズボン。

冬服はその上に着るブレザーと、分厚い黒ズボンだった。

そして鞆は、群青色のスクールバッグ。

「何から何まで、ありがとうございました」

「いいえ、また来てね」

俺とアーシェは礼を言って踵を返す。

ロビーから四角い箱に向かう途中、アーシェは落ち込み気味に言うてきた。

「その、ユーヤってすごいんだね・・・主席が危ういよお」

ため息を吐くアーシェに、俺は笑って答える。

「心配ない。俺はこの学園を楽しむために来た。必死に主席を取ろうなんて思わないさ。それに・・・」

「それに？」

俺のほうを覗くアーシェ。俺は何かを達観したような遠い目をして、言った。

「STR1100って奴は多分・・・バカだ」

「・・・なんでそんなことが分かるのよ？」

「いや、経験上、そんな気がするんだ・・・力が無駄に強い奴ってのは、大概バカなんだ・・・」

「そう。・・・このあとはどうする？」

アーシェがそう問いかけると同時に、俺らはまた四角い箱に乗り込み、出口というボタンを押した。

「そうだな、一度寮に戻ろうかと思う。そういえばアーシェのカードもみたいんだけど、いいかな？」

「え！？・・・ユーヤにみせる自信がないのよね」

「ええ？・・・じゃあ入学の日は絶対、な？」

「う・・・」

出口の扉が開き、俺たちは太陽の下へと出る。

アーシェが気持ち良さそうに伸びをしているのが可愛い。

「ユーヤの寮って、どこの部屋？ 近くだと嬉しいけど」

「・・・女子と男子は同じ寮なのか？」

俺とアーシェは並んで、寮へと戻っている。

「そうよ？ 12歳から15歳までは共同の寮で過ごして、16歳以上・・・つまり4年生になると男子寮、女子寮に別れるの。だから合計3つ」

なるほど、だから3つの寮があったわけか。でもそうすると？

6000人が6年ぶんあるらしいから、1学年1000人？ それ
が3学年分同じ寮に入るから、3000人！？

多すぎないか・・・？ 寮は確かにでかかったけれども、一部屋何
人になるんだろう・・・？

「俺は確か・・・」

そう言って学園長からもらった鍵を見る。銀色の光沢を発するその
鍵には、2053と書いてあった。

・・・ちょっと待て？ 20階以上あるのかこの寮は？ そして一つの
階に50部屋以上！？

「2053だけど・・・アーシェは？」

「2053！？ やった、近くじゃん。私は2098よ」

一階には食堂が備えられているらしいが、これは夜と朝用らしい。
・ ・ 寮部屋にキッチンとかついてないかな？

まあ流石に無理か・ ・ ・ 俺は自炊派なんだが。

鐘音が鳴り、扉が開く。20階、と正面の扉に表記されているため
分かりやすかった。

アーシェとともに四角い箱を出ると、左右に廊下が続いている。こ
こは日が差し込まないのか、天井に明かりが点いていた。

正面の看板に表記されている通り、右に行くと2001から205
0まで。どうやらコの字型に部屋が割り振られているらしく、20
25の正面には2026の部屋があるらしい。

そして、左はそれを反対にしたように、2051から2100まで
21が上二桁のくせに、下二桁が00だと一個下の20階なんだな。
つまり1900は18階にある計算になる。

さて、そんなことはどうでもいい。俺の部屋は左側に行って割りと
近くに存在した。

するとアーシェが声をかける。

「じゃあまた後で呼びに行くね」

そして俺の部屋の正面にある部屋へと入っていった。・ ・ ・ 正面つ
て。

「まあいいや。俺も入るか」

俺は2053と銘打たれた扉に鍵を差込み、回転させる。

何かが外れた音とともに、ドアノブが回転可能になった。

「親父が暮らしていた部屋、か・・・」

そこを開くと、小さな玄関。靴を脱いで入り、いろいろ覗いていく。

リビング、トイレ、バスルーム、そして俺は、寝室を見て確信した。

マジで一人部屋だった、と。

ベッドが一つと、クローゼットが一つあるだけの質素な部屋。・・・

そう、ベッドが一つ。

いやっほーい！

ルームメイトとめんどくさくなったりしたら・・・などと不安を抱えていたのだが、これなら万事OK無問題！

そしてリビングの奥を見ると、憧れのキッチンまでも付いていた。

親父もここで一人暮らししてたのか・・・。

・・・ちようどお昼を過ぎたころだし、自炊するか。

皮袋の中から、適当に食料品を取り出す。

いつか料理をしたときに、とポイポイ食料品を突っ込んでいたのが役に立った。

この皮袋の中は鮮度が保つ。よってどんなものでも余裕で入れていられるのだ。

「ネギとタマゴ、炊いたご飯・・・天が俺に、チャーハンを作れと言っている」

バカなことを呟き、調理にかかった。

一通りの作業が終わり、盛り付けようかと思う頃。

ピンポン

インターホンの音がして、ノックが数回。

とりあえずフライパンをコンロに置き、玄関へと移動した。

「ほいほい」

俺がドアを開くと、アーシェが居た。

「来ちゃった。・・・あれ？いい匂い」

「ああ、昼飯作ってたからな・・・」

「お昼？一緒に食堂行こうと思ってたんだけど・・・」

アーシェは悩み顔で唸るし腹も減ったので、とりあえず。

「上がれよ」

「へ？ いいの？」

「作りすぎたし、部屋で一緒についてことだろうか？」

「ホントに！？ お腹空いてたんだあ。ご相伴に預かります」

「はいよ」

俺はそう言ってドアを押さえていた右腕をあげ、アーシェにその下をくぐらせる。

「お邪魔しまゝす」

リビングへ歩いていくアーシェの後ろを、ドアに鍵を掛けてからついていく。

「じゃあそこ座ってて」

一人用の部屋なのに何故か4人座れるテーブルにアーシェを座らせ、キッチンに行く。

新たに皿を一つ出し、2つの皿にチャーハンを盛り付けていった。

「はいよ、俺製チャーハン」

「美味しそうですね。いただきます!」

アーシェの前にチャーハンとスプーンを置き、自分も彼女の対面に座る。

「はいよ。んじゃ俺も」

カツカツと、スプーンが皿に触れる音だけが聞こえる。

「何よこれ・・・」

一口食べたアーシェがふいに呟いた。

「? どした?」

「食堂のなんかよりずっと美味しい」

目を輝かせて見つめられ、少し気圧された。

「お、お褒めに預かり恐縮至極」

簡単にネギと玉子と塩胡椒のチャーハンだったのだが、まあそれで喜んでくれるならいいか。

その後、美味しそうにチャーハンを頬張るアーシェを眺めながら昼飯を楽しんだ。

洗い物くらいは手伝うというので、俺が洗い終わった皿やスプーンを拭いてもらう。

「ユーやはさ、自炊派なの？」

「あん？ああ、その方が慣れてるし、好きだ」

「そっかあ」

何かを決意したような目で、皿を拭くアーシェ。

なんだ？

「どうした？」

全てを洗い終わり、水魔方陣に触れて止水する。

「え？ あ、いや何でもない。それよりこのあとどうする？」

「そうだな・・・じゃあこの学園の案内頼めるかな？」

「わかった。といっても私もそんなに詳しくないけど」

アーシェも皿拭きを終え、一旦部屋を出ることにした。

念のため皮袋は持っていくことにし、制服と鞆の類はリビングにあるソファに置く。

「よし、こっちの準備はできたよ」

「じゃ、行こっか」

部屋の鍵を締め、四角い箱に乗り込む。

浮遊感を感じるこの場所で、俺は口を開いた。

「んで、まずはどこに？」

「ん、この学園ってさ、東に寮エリア、南に校庭エリア、西に普通教室棟、北に特別教室棟、中央に職員棟なんだよね。今は春休みだから多分普通教室棟には入れないから・・・特別教室棟に行こうと思うけど」

「ん、任せる」

鐘音が鳴り、1階へとたどり着く。まあ20階だけあってそのタイムラグは長い。

俺たちはホテルの中のような場所を歩き、エントランスホールを出た。

「・・・この学園どれだけ金使ってたよ」

俺が言うと、アーシェが金髪を払いつつ答えてくれた。

「ここは国でも有数の超名門学園だからね・・・国も資金を惜しまないのよ」

「詳しいな、アーシェ」

「・・・まあ、ね」

お茶を濁したように尻すぼみな声を出したアーシェをあえて気にせ

ず、俺は続けた。

「そか。・・・さて、特別教室棟とやらに行こうか」

「ん、分かった！ こっちだよ」

007 一日の終わり

職員塔もとい職員棟の前を通り、塔を中心に作られた十字路を北へと向かう。

するとしばらくして、普通教室棟のように幅広いわけでもなく、寮のように高層なわけでもなく、職員棟のような塔でもない、たくさん建物が渡り廊下を通じて迷宮のようになっている場所へと辿りついた。

「……いろんな意味ですごいな。この学園は」

「そうね。ここが特別教室棟。私は魔法使い科、戦士系なら戦士科の教室があるのだけど……ユーヤはどこだろうね？」

特別教室棟の前に立ち尽くし、俺とアーシェはそう語った。

だが、アーシェの疑問は全くだ。俺はどこの教室に行けばいいんだ……？

そういえば学園長が言っていたか。俺は特別カテゴリだと……これのことを言っていたのか？

まあ、いずれにせよ入学式には分かるだろう。

「本当に、どこだろうな……。いいさ、とりあえずどんなところか、見てみたい」

俺がそういうとアーシェは頷き、一番近くにあった建物のドアノブ

を回して引いた。

その部屋は正方形の真っ白い空間。何も置いてはいなかった。

「なんだ・・・？ここは。」

「ここはバーチャルルームね。幻術師の技を用いて真っ白な空間を作り出し、いろんな状況をセットして動き方を学習する。どのクラスの間もここで学ぶことはあると思うわ。」

なるほどな・・・と頷いて、ふと考えた。

これって・・・幻術に既にハマっていないか？

・・・殺気！？

「アーシェ！跳べ！」

「へ！？」

驚いたものの、アーシェは瞬時に飛び退さる。

するとアーシェの居た足元に、スパイクと呼ばれるレンジャー系ク拉斯の技・・・床から槍が飛び出す仕掛けが作動した。

「何よこれ！」

「ツツ、誰か居るのか！？ 幻術師が！」

「どうしょ！幻術なんてどうやって・・・！？」

アーシェは幻術戦は初めてだったらしく、デスベアーとの戦いで見せた冷静さがどこにもない。

つと、俺の足元にもスパイクが襲う。

「ツツ！^{リフファイン}“精製”！」

皮袋から瞬時に、“月光蝶の鱗粉”と“ヴォイドの瞳”を取り出し、^{リフファイン}“精製”して球体にする。

怪しげな黄金色の球体と、どす黒い球体が出来た。

「^{クラフティング}練成”！」

両手を合わせ、カオスを作り、押しつぶす！

「^{レジストダスト}精錬・落宝金銭粉！」

俺が手を広げると同時に、黒金色の粉末が霧散していき・・・白い空間は只の木造の部屋となる。

^{レジストダスト}落宝金銭粉は、全ての魔法効果や幻術を打ち消す精錬術。

この素材のレア度は高いが、親父と各地を旅してきた俺はこんなものの、腐るほど持っている。

そしてこの部屋には、一人の女性が立っていた。

「ふーん・・・私の幻術を破るなんてね」

「あ、貴女は！」

どうやらアーシェは知っているらしい。この学園の関係者であれば、教師であろう。

年齢はだいたい25歳前後。黒のローブを纏い、怪しげで妖艶な顔立ち。赤茶色の髪の毛は、優に腰まであるのでは？

「知っているのかしら？ 私は教師のアルファです。職業は幻術師よ」
クラス

「・・・どうでも良いっすけど、なんで俺たちにこんなことを？」

あら、と微笑んで、アルファと呼ばれた女性は言う。

「私が精神統一して幻術空間を作っていたところに、貴方達が来たのですよ？」

あゝ・・・言われてみれば、勝手に入ったの俺らだわ。

「そうっすね。俺たちが悪かったっす」

「あら、そうですか。でも今の技は・・・リファインリスト精錬術師？ 幻術師戦にも慣れているとすると、相当修羅場をくぐって来たのですね？」

彼女の茶色い瞳を見ると、全て見透かされるような気がする。

俺は黒髪頭をガシガシと掻きながら、苦笑した。

「まあ、それなりに」

「フフ、魔法使いの貴女も、瞬間の判断が出来るようにね？ 実力、というより能力的には、貴女も彼に劣らず優秀ですから」

「……っ！ど、努力します！」

羞恥に頬を真っ赤に染め、アーシェは言う。確かに俺よりも戦闘面ではかなり優位だろうしな。

「じゃあ、またね。特別教室棟は今、先生方が使用しているから、近づかないほうが良いですよ」

「分かりました。では」

俺はアーシェを連れ、この部屋を後にした。

この学園に来て、最初の夜。

俺は夕飯も自炊するべく調理をしていた。

キッチンから見える景色はもう暗く、火属性魔法を使った明かりだけが、西の教室棟や職員棟にポツポツと灯っている。

結局あのあとは普通教室棟も行けないということだったので、適当に道順や、中庭などといった休憩スポットの場所を覚えた。

アーシェは先生との戦いのあと酷く不機嫌で、正直参った。

多分幻術相手に何も出来なかったのが悔しいのだろう。

・・・で。

「ユーヤあ！ご飯まだあ！？」

「待てって！もう少しだから！」

リビングのほうから“不機嫌”の声がする。

なぜか知らんが、夕飯も俺のところで食べるらしい。

アーシェの部屋のキッチンが不憫だ・・・まあ食堂使う奴も結構い

るみたいだし、キッチンの有無はあんまり関係ないのかもな。

俺は今、適当にトーストを焼いてグラタンをオーブンに放り込み、果実ジュースを絞っている。

オーブンがグラタンを作れるほどハイスpekだったことには驚きだが。

んで、皮袋の中に何かの折に入っていたミキサーを使ってミックスジュース。

・・・なんだか明日の朝食はこれの残りでもいい気がするな。言い換えると、夕食っぽくない。

チーン、と気持ちの良い音がして、グラタンが焼けた。鍋掴みを手
に嵌め、そのままテーブルへと持っていく。

「アーシェ、鍋敷きテーブルの中央に置いてくれ」

「分かった・・・あ！グラタン！！」

分かった・・・まではかなり不機嫌だったのに、グラタンだと知った途端テンションを上げる。

食料の力って素晴らしいな。・・・ここまではしゃぐのはやっぱり、12歳のガキだからか？

まあ俺もだが。

トーストを数枚焼き、グラタンのおともに。ミックスジュースをコ

ツプに注げば、今日の夕飯は完成だ。

鍋の中にあるグラタンを深皿に取り分けると、アーシェはホクホク顔でその皿を自分の前へと寄せる。

「いっただっきまーす!」

ずいぶん嬉しそうなのは良いんだが・・・。

「なあアーシェ」

「ムグ？」

俺はまだ食べ始めてもないっちゅーにコイツは・・・。

「もしかして、これから毎日こうなるの？」

「？」

俺は食事の乗ったテーブルと、俺自身、アーシェを順に指差して言った。

つまり・・・。

「これから毎日、俺のところに飯食いに来るのか？」

「あ・・・あはは・・・えっと・・・これからはちゃんと食材をもってきます!」

・・・。

まあ人数多いほうが美味しいな・・・それなら経済的にも問題ないか。

「そうしてくださいね？」

ニッコリ微笑んでやると、アーシェはコクコクと青褪めながら頷いていた。

俺はミックスジュースをあおり、グラタンに手をつけた。

「あのさ、ユーヤ？」

「どした？」

フォークを止めて聞いてくるアーシェに、俺は疑問符を浮かべる。

「今度さ、料理教えてよ。」

ああ・・・食堂行くとか言ってたし、料理できないクチかこの子。つてか、昼にしてた決意みたいなのは、これのことか。

「分かった。朝は忙しいから、夕飯な？」

「うん！」

アーシェは元気よく頷いた。結構可愛いんだよな、そういう仕草がさ。

お、自分で言うのもなんだが、美味しいなグラタン。

「すっかり忘れてたけどさ、あの召喚獣なんだと思う？」

おお、俺もすっかり、だったぜ。

アーシェの疑問に、正直俺は唸るしかない。

「・・・とりあえず今の俺たちには、警戒することしかできないんじゃないか？ ターゲットが誰かも、敵が誰かも分からないし」

「そうね・・・嫌な感じ」

確かに。召喚獣、しかもかなり強かった。召喚獣の実力は、召喚士の実力と比例する。アーシェが苦戦していたんだ。かなりの手練^{てだれ}と見ていいだろう。

「明日はどうする？」

アーシェが問いかけてきたので、俺は思っていたことを述べる。

「とりあえず部屋が寂しいし、食料も買い込んでおきたい。この袋の中は極力、非常用に残しておきたいからな」

「だったら北の門を出ればそっちに街があるわ。私もいろいろ買いたいし、ユーヤに渡す食材も、ね」

ね、じゃねえよ全く。と苦笑した。

「じゃ、明日も一緒に行動しようか。入学準備ってことで」

「分かった！」

007 一日の終わり（後書き）

申し訳ありませんが、ストックが切れそうなので“平日”毎日更新と致しました。

008 入学準備（前書き）

用語集をちよつと

L V・・・学園在学経験のある者にのみ与えられる、冒険者用経験習得システム。これがあるとないたでは、一時期における成長度合いがまるで違う。

008 入学準備

目が覚めると、天井があった。

天井があるところで寝るのなんて、3ヶ月ぶりくらいではないだろうか？

ずっと、東のフィールドばかりを旅していたからな・・・。

俺が備え付けの時計・・・壁時計に目をやると、08..20。学校があつたら間違いなく遅刻だな。

ちなみに明日からは7..30には起きないと遅刻になる。朝飯を作ったりしていると、8..30の登校時刻に間に合わないのだ。

まあその知識も、アーシェの受け売りなのだが。

とりあえず寝ぼけ眼をこすり、伸びを一つ。

朝風呂をしようと寝巻き代わりのスウェットを脱ぎ捨て、風呂場へと直行する。

脱衣所を抜け、部屋付きのユニットバスに入った。

サー、というシャワーの音が心地よく、それを肌感じて寝汗を流す。

「あゝ、いいわあゝ・・・」

ピンポン

おい誰だ、俺のシャワータイムを。

シャワーの栓を止め、適当に体を拭き、そのタオルを腰に巻いて玄関に應對しに出る。

点々と廊下にしずくが落ちるが、気にしない。そのまま扉を開く。

「はーい宣伝お断りー・・・あん？」

目の前に、顔を真っ赤にした可愛らしい制服姿のアーシェが立っていた。

その口が段々と開いていき・・・

「な・・・」

「な？」

「なんて格好してんのよバカあああああ！！！！」

「いやいや朝風呂してたらアーシェが来たんだろうが」

いきなり怒鳴ると他の寮生に迷惑だろうが全く。

なぜかアーシェは俺を必死に視界に入れないようにしながら、俺の部屋の奥・・・リビングへと進んでいく。おい。

「早く服着てよ！ 早くご飯作ってよ！」

「どー考えても後者が本音だろ!!」

ため息を吐きつつ、俺は服を着替えることにする・・・といってもそんなに服装にバリエーションがあるわけでもないので、

「試しに制服着てみるか」

アーシェも制服着ていたし、なんとなく俺も着てみたくなった。

ちなみにこの学園の制服はブレザー。

アーシェが着ている女子の制服は、茶色チェックのミニスカートに白い角襟ブラウス。赤いリボンが見事にマッチし、その上から灰色とも銀色ともつかない色のブレザー。

俺が手に取った男子の制服は黒ズボンに、白いYシャツ、女子と同色のブレザー、ネクタイ。

ネクタイとか。めんどくさいし堅苦しいからしないでいいか。

ついでにブレザーもめんどい。そんな寒くないし、Yシャツで充分。俺は結局黒ズボンに半そでYシャツという格好で、キッチンへ向かった。

“着崩す”なんて言葉を知ったのは、かなりあと。

昨日の残りであるグラタンを温め、またも残りのミックスジュース。

あとは適当に野菜を集め、調味料を適当に合わせたドレッシングをかけてサラダ。

朝食の準備は整った。

「ほいよ」

「あ、出来た？」

まだ正直顔が赤いアーシェは、俺と眼を合わせない。

「あれは事故だろ・・・」

「っ！　ほとんど裸で女の子の応対に出るってどうなのよ!？」

「いや・・・アーシェだと思わなかったし」

「だからって普通何か着てくるでしょ・・・」

戻りかけていた顔色が、また真っ赤になる。

その後もまだブツブツ言っていたが、俺が朝食に手をつけると黙った。

つつーか黙々と食べ始めた。・・・そういや食材持ってくるって話はどうなった？

「ふう、まあいいや。とりあえずこの後どうする？」

あらかた食べ終わり、俺はアーシェに聞いた。するとアーシェは金

髪を髪ゴムでサイドテールに纏めながら、

「んーそうね、とりあえず北門を出て、街に行きましょう」

「了解」

北門も東門と変わらず、重く錆びたような音を立てながら開いた。
今回は試しに俺のカードを使ったのだが、正常に働いてくれてよかった。

その門の向こう側には、確かに大きな街のメインストリートが広がっていた。

道は広く、商人達の寄せ声もよく耳に通る。

大きな道も、人人人で溢れ返っており騒がしいことこの上ない。

「なかなか、面白そうだな」

「ここは学園の生徒もかなり利用するから、学生割引とかもあったり、寮生活に必要な物資もそろえてあるわ」

それは・・・至れり尽くせりだな。

アーシェと一緒に街道を歩く途中も、何度も露店の商人に絡まれたり。

彼女は断り方が上手く、なんだか俺はそういう時まかせつきりで申し訳なかった。

「ユーヤ、とりあえずどうするの？」

「うん・・・生活用品かな。備品だけじゃ物足りないし、買いたいものも結構ある」

「ふーん。お金は大丈夫なの？」

「伊達に冒険の数こなしてねえよ」

そう言って俺はにっこり微笑んだ。

するとアーシェも

「サスガ。お昼代くらいはおごってね」

・・・一杯食わされたな。でもアーシェはかなり上機嫌だし、そっ
としておこうか。

歩くたびにピョコピョコゆれるサイドテールが可愛らしい。昨日と
違い耳が出ているので、ああエルフなんだなあと思う。

「ここがおあつらえ向きなんじゃない？」

そう彼女が立ち止まったのは、なにやら日用品の専門店だった。

なるほど確かにここなら。

そう考えた俺は、アーシェを連れ立って入ることにした。

「いらっしやい」

元気の良さそうなドワーフのおばちゃんが応対に出てきた。

ひとまず、寮に来たばかりで何も揃っていないと告げると、そうい
う人用のセットがあるらしく持ってきてくれた。

学生向きの街か・・・本当にそうだな。

「このくらいになるね」

そうおばちゃんが持ってきた品を挙げると、

バケツやら照明はもちろん、作業に必要な包丁一式に魔力石なんてものまで揃っている。

「これは・・・いいな。いくらなんスカ？」

「全部で10000ルクかね。でもこれだけありゃ当分平気だろう？」

10000ルク・・・妥当か。魔力石なんかも揃ってそれならお手ごろだろう。

「私じゃちょっと手が出せないわね・・・」

まあ12歳の子どものお小遣いなんて、500ルクから3000ルクぐらいだろうからな。

でも俺には、親父との旅で手に入れた金が腐るほどある。

「俺、買うわ。」

皮袋からごそごそと紙幣一枚を取り出す。10000ルク紙幣。貨幣の中では一番大きい金額である。

おばちゃんはそれを懐に入れると、俺の皮袋を取り、丁寧に一つ一つの品を入れ始めた。

「お客さん、どっかの貴族かい？　こんな大金平気で持つなんて・・・」

「貴族なんかじゃないです!!」

おぼちゃんの声に反応したのは、俺ではなくアーシェだった。しかもかなり焦った声で。

「アーシェ？」

「あ、ううんなんでもないの、ごめんなさい・・・」

俺は落ち込むアーシェを背中に隠すようにして、フォローを入れる。

「俺は貴族じゃないっスよ。たまたま、長い旅で手に入れた金があるだけっス」

おぼちゃんも少々驚いたようだったが、俺が話すと

「そ、そうかい。じゃあまた来てくれ」

と返してくれた。

その後しばらく店の場所などを覚え、お昼時を少し過ぎたころ。

俺とアーシェは通り沿いのオープンカフェへと来ていた。

俺がマームのカツサンド、アーシェもサラダサンドを注文し、円形テーブルに二人で腰掛ける。

ちなみに俺のおごりだ。

「にしてもさっきはどうしたんだ？ あんなに取り乱して」

「へ？ ああいや・・・気にしないで」

目を背けるアーシェ。昨日のソレと違い、表情に陰りが見える。

ふむ・・・貴族ってワードは何かあるな、こりや。

少しの間沈黙が周りを支配していると、注文した品々が来る。

俺はカツサンドにパクつきながら、アーシェに別の話題を振ることにした。

「明日入学式だけど・・・形態とか全然分からないんだよね」

すると彼女は少し躊躇いながらも、話に乗ってきてくれた。

「そうね。まずクラス決めがあるわ。実力とか職業とか関係なく、クラス25クラスに割り振られるの」

・・・多!?

「1年25組ミナモト君ってか？」

語呂悪すぎだろ。

「まあ、そうなるわね。そのクラスで、一年間過ごすのよ。いろんな行事もあるから楽しみにね」

ふーん・・・やっぱり詳しいな、アーシェ。

「んで、入学式ってのは？」

「エントランスホールにクラス分け表があると思うから、まずそのクラスに移動。そこから屋内集会場を利用して式典ね。まあすることは無いからおとなしく寝ていればいいと思うわ」

俺はその説明の間にカツサンドを食べ終えてしまう。アーシェも一通りの説明を終えて、サラダサンドに手をつけた。

なるほどね。でもそうするとアーシェと同じクラスになれる可能性は限りなく低いな。

んむう、どないしょ。これから助けてくれる人が居ないかも知れないよな……。

「あ、そうだ」

ふいにアーシェが言う。

「どうした？」

すると何か顔を赤くしながら、モジモジし始めた。うわあ、めっちゃくちゃ可愛い……。

「クラスは確かに同じ授業を受けるメンバーなんだけどさ。それとは別に、校外学習っていうのがあってね？」

「何すんの？ ソレ」

「PTを組んで、定められた場所にそのメンバーで行かなきゃいけないの」

「ふむ。面白そうだな」

「それでね、それでね？」

ますます顔を赤くして、急に席を立ち上がる。

「私と一緒にPT組んでください!!」

・・・全然いいけど。

「え？ そんなこと？」

そう言うのと、なぜか目に涙を浮かべてアーシェは言う。

「あ・・・やっぱりダメっかな？」

いやいやいやいやなんでそうなる。初めての友達で、それもありの実力者。なんの問題が？

でも、なんか目に涙溜めてるアーシェも凄く・・・。

・・・殺気!？

「い！ いや、全然いいけど。むしろよろしく」

「ふえ？」

なんだか居た堪れなくなったので、了承の意を示す。だってさ、周りの目が尋常じゃない殺気持ってたもん。こりゃきつと、いや絶対「なに可愛い子泣かしてんだ」って意思が詰まってる……。

「かなりハイスpekのソーサラー。なんの問題もないでしょ。それよかPTのルールとかのを知りたいな」

人差し指で自分の涙を拭いて、彼女は良かったあ、と微笑んでいた。

「PTの説明？」

「そう。上限はあるのか、とか臨時PT可なのか、とか」

「ああ。上限は6人。それで、臨時PTは規定として認められていないわ。ただ、解約は問題ないみたいね……解約なんて、しないでね？」

「しないから！ 最初っから6人選ぶのは愚策なのかな？ って思っただけ」

また泣きそうになるアーシェが怖い。っつーか視線をぶつけてくる客（特にオッサンども）が怖い。

「そう……だね。確かに愚策かも知れない。私としてはキッチンと見定めたヒトだけを入れたいわ」

「なるほど了解。じゃあ最初は俺とアーシェだけで良いか。それでも充分こなせる気がするし」

リラ森林に居た連中を考えると、ね。

「分かった。楽しみだね！」

「ああ」

さも嬉しそうに元気よく答えるアーシェを見ると、なんだか全てがどうしても良くなるような錯覚を覚えた。

俺とアーシェはその後、食材の買い物を済まして帰途についた。

学園へと入ると、昨日よりずっと人が多い気がする。

「なんだか、人が多くないか？」

「あゝ、確か今日は上級生の始業式ね。これから新たな学期が始まりますよーっていう儀式？」

「・・・要るのソレ？」

「さあ？」

そんなことを呟きつつ、寮のほうへと戻る。

先輩であろう騎士やら魔法使いやらといった人々とすれ違うが、あまり実力は感じない。

俺は親父との旅の経験で、誰がどんな実力を持っているのか大体は把握できる。

だから初めてアーシェと出会ったときも、INT（知力）が高いと判断できたのだ。

「明日は入学式ね」

「楽しみ、かな俺は。親父があれだけ推したってことは、よっぽど楽しかったんだろうな」

俺とアーシェは寮のエントランスに着き、四角い箱に乗り込む。

20階のボタンを押し、浮遊感に襲われる。

「その親父って人、よく話に出てくるよね？」

「ん？ そうだな。なんせ6年間、一緒に旅したからな・・・」

「ふん・・・強いんだ？」

「俺の10倍は強いな」

「そんなに!？」

驚いた顔をしているが、正直俺なんてシャバに出れば大したことはない。

親父以外に、あの人もかなり強かったしな・・・。

鐘音がして、扉が開く。

「今日は夕飯の作り方、教えてくれるんだったよね？」

「あゝ、そうだったな」

「何作るの？」

俺は自分の部屋の鍵を開ける。

「さあ、あとで決めるさ」

俺が朝食のセットが終わると同時に、インターホンが鳴る。

そういえばこれ、どういう魔術なんだろう。

「おはよう！」

「はよ」

アーシェはリビングに上がると、そそくさと既に自分の席と化した右奥の椅子に腰掛ける。

俺はその正面に座り、朝食をとることにした。

「入学式・・・これから私の主席生活が始まるのね・・・！」

やたら意気込んでいる目の前のがり勉を見てため息を一つ。

「まあ、うん。頑張れ」

朝食を手早く済ませると、時刻は08...00。

一昨日渡された群青色のスクールバッグに皮袋を放り込み、一応ブレザーも入れて準備完了。

「さて、俺は準備できたよ」

「あ、待って。私部屋に鞆忘れた！」

とりあえず二人で俺の部屋を出て、アーシェはバタバタと正面の自分の部屋へと入っていった。

俺が部屋の前で待っていると、ところどころの部屋から生徒が出てきては四角い箱のほうへと向かっていく。

中には二人連れなんかも居たり、先輩のような人・・・背が高い人も居た。

別にこの階が一年生の寮、というわけでもなさそうだ。

そんな時ガチャ、と正面の扉が開いて、見慣れた少女が出てくる。

容姿端麗な金髪エルフ。サイドテールにまとめた髪は、あるくたんびにピヨコピヨコ揺れる。

チェックのミニスカートと白ブラウス、赤いリボン、灰色のブレザー・・・彼女がソレを着るとやっぱり可愛い。

「・・・？ なに？」

「いいや？ 行こうか」

二人で並んで廊下を歩く。窓がないので、天気などは分からなかったが。

四角い箱にのり込み、浮遊感を感じてからエントランスへと降り立つ。

自動っぽい扉が開き、外の気持ちよい天気が目に入った。

「ああ、やっぱり気持ち良いよね」

「そだな」

眩きつつ、俺は外の人口の多さに驚いていた。

6000人が通う学校・・・全寮制であるからには、この通学時間帯は人で溢れかえっているのは仕方がない。

だが・・・

「壮観、だなあ・・・」

かなり広いと感じた東エリアから普通教室棟への道も、歩きにくいとまでは言わない人が多い。

「さ、私達も行こうよ」

アーシェに促され、俺も歩き出す。

ザワザワと、話し声もよく聞こえる。それはほとんど上級生のもので、多分入学前に友達がいるというのは珍しいことなのだろう、同級生と思しき人はだいたい一人で歩いている。

学年章などがあれば分かりやすいのだろうが。

「改めてみると、教室棟がデカイのも納得だわ」

俺が感心とともに眩く。何故って、俺の周りにいた沢山の人々が次々に棟に吸収されていくからだ。

パンクしねえのか？　と危惧したいくらいにな。

俺らもその流れでエントランスへと辿りついた。

巨大なホールになっていて、左右に軽くカーブした階段が上へと登っている。

「ほえー・・・すごいな」

「だよね・・・あ、あそこに掲示板があるよ！」

アーシェの指差す先には、確かに文字の羅列された掲示板が、かなり横幅広くに渡って有った。

「クラス決め・・・か」

「なんか私、緊張してきた。ユーヤと同じクラスがいいな・・・」

そんなことを言うアーシェの不安そうな顔がまた保護欲をそそられるほど可愛い。

さて、着いた。

1組から順に、自分の名前を探していく。一クラス40人らしいな・・・。

1組には居ない。2、3、4・・・

周りの連中も同じように探しているらしい。1000人が探すものだから、先生らしき人たちも騒ぎ立てている。

「ほら！ 自分のクラスが分かった奴はとっとと行け！」

上級生は、何か懐かしげな笑みを見せながら、階段を上っていく。おおかた、いつかの自分もああったなあってところだろう。

さて、自分のクラス探しに戻らなければ。

15、16、17・・・あ、居たあ！

1年17組・・・語呂^{わる}悪！？

地図で場所を確認すると、どうやら6階のようだ。一年ごとに1階ずつ下がっていくみたいだな。2年生は5階、3年生は4階、と。

んで、地下に屋内集会場か。

さあ、アーシェはどうなったんだ？

「アーシェどうだった！？」

俺が聞くと、まだ探している最中のようだ。人多すぎて、アーシェ一人見つけるのにも一苦労だぜ。

「・・・ユーヤ！何組！？」

「俺17」

「17・・・私18だよ・・・」

凄くしょんぼりした表情のアーシェ。むう・・・隣か。いやそれでもラッキーだけどさ。

「いいじゃん隣なら。近いし、一緒に行こうぜ」

「うん・・・そうだね」

確かに友達が誰も居ない不安ってのはあるかもな。最も、俺に友達が居た経験もないのだが。

階段を上り、6階へ進む。これ中々に堪えるな。いい運動になる。

階段を上りきると、左の壁に看板があった。どうやら、ここも寮と同じようなつくりらしい。

コの字型に右には1組から6組、折り返して7組からずっと左へ行って、左側の奥は19組。そしてその正面に20組があり、今居る階段の左隣が25組、と。

とりあえず俺たちのクラスは左側にあるので、左側に進路を取る。

俺の17組の前に着くと、アーシェは寂しげに

「また後でね・・・」

と微笑んだ。・・・うーん、なんか弱弱しくてひっかかる。

そんなことは良い。俺はクラスに入ることにした。

「・・・これが教室か」

思わず感嘆を洩らす。

整然と規則的に並んだ机、本でしか知らなかった黒板。想像よりで
けえ。

そして、生徒はほとんど座っていた。

黒板には、席割りだろうか？貼り紙がしてあった。

俺の席は・・・お、窓側後ろから2番目か。

いそいそと、その席に向かう。

俺が着席すると同時に、鐘の音があった。

キーンコーンカーンコーン・・・学園に来てから何度か聞いた音だ
が、ここに居るとずいぶん身近に感じるな。

そして、担任であろう教師が・・・ってアイツかよ。

「おはようございます。私が今日からの担任を勤める、アルファで
す。職業は幻術師^{クラス}。よろしくお願いしますね」

最後のよろしくは、明らか俺に視線を合わせていた。

一昨日ハメられた、幻術使いだった。

「はぁあゝ・・・何でこうなった・・・」

一人ため息を洩らすも、彼女の扇情的な容姿に鼻の下を伸ばす男子生徒は多かった。

「ではまず、自己紹介をしましょうか。まだ入学式までは時間があることですし」

そう言ってアルファ・・・いや先生と呼ぶしかないのか。先生は廊下側一番手前の生徒を壇上へ引きずり出した。

「あ、ええっと・・・アスタ・エンジャー。職業はクレリックで種族は人間です」
ヒューマン

それを皮切りに、次々と順番に自己紹介をしていく。

最初のコイツはクレリック・・・回復系魔法使いの第一段階だな。

俺は実力を見分けるために一人一人を見据えていくが・・・一昨日受付の女性に見せてもらった“一般的な12歳”にそぐわない、平均的な連中しか居なかった。PT組もうとは思わないな、正直。

要約すると、俺やアーシェはかなり異質だったということだ。

リラ森林で見たような連中がこの学年の平均だとすると・・・な。

しばらくして、俺の順番が来る。

「ユーヤ・ミナモト。精錬術師の人間っス。よろしく」
リファイニスト ヒューマン

俺が壇上でそういうと、大多数は頭にハテナを浮かべていた。

まあアーシェも知らなかったらしいし、仕方ないか。だが、俺の後ろ、つまり一番後ろの奴は違った。

俺を見て口元だけで笑いながら、頷いている。

俺と交代で壇上に上がったそいつは、鷹揚に自己紹介を始めた。

「僕はワルサー・ステイングル。職業はシーフで、種族は鳥人^{ダリア}。よろしく。知っている人もいると思うけど、情報屋をやってる」

・・・コイツは確かに能力値高いわ。

俺や、推測で見たアーシェよりは低いと思うが、それでもこの中では突出している。特にA G I（敏捷性）が。

鋭い目つきに、緑色の髪・・・そして鋭利な爪。必要時には翼を広げて空を飛ぶという鳥人^{ダリア}の少年。

それにしても情報屋ね・・・。

俺の後ろに座ると、シャーペンが何かで、背中を突っついてきた。

「18組のアーシェ・クラルヴァインとはどういう関係だ？」

・・・とりあえず情報収集能力はすげえことが分かった。

「情報料10000ルクだな」

「な!？」

ニヤリと笑って俺は言う。何せ情報屋だ。情報の売り買いもするの
だろう。

「ぼったくりって言うんだぞ。そんな金額、生徒会長の弱みレベル
だ」

コイツがそんな情報持っているのなら是非買ってみたいものだ。

「ま、情報屋なら自分で調べろ」

「お、いいね。そういう挑戦なら受けるぜ！」

・・・別に俺とアーシェには何の関係もないのだが。

情報屋、コイツとは友達になって損はなさそうだ。

友達で損得を考えるのはどうかと自分でも思うけどな。

「俺はユーヤだ。よろしくなワルサー」

「おう、まさか精錬リファイナー術師にめぐり合うとはな。よろしくユーヤ」

「はい、じゃあ連絡が入りましたので、皆さん移動しますよ」

適当に俺らが会話している途中に連絡があったようだ。

先生の引率で、俺たちは地下・・・屋内集会場へと集まる事になっ
た。

席に座ると、俺は結構舞台から遠い。

隣にワルサーがいるので、くだらない情報を聞き流して暇つぶしにしていた。

学園長が出てきて、話を始める。

あのオッサン、仕事の際はサスガに威圧が強い。いや、威厳というべきか。

「オッサン、プライベートは面白いんだけどな。フレンドリーだし」

「そうなのか！？ よし、その情報いただき！ あとで真偽を確かめて売る！」

「へえ」

となりでワルサーが意気込んでいる。

つつーかコイツ、情報屋としてはかなり信用あるのかもな。

人がボソッと呟いた情報を捉え、真偽を確かめるために奔走する。

コイツの持つ情報は全て真実と言ってもいいかも知れない……。まだ保証はないが、そんな気がした。

『新人生代表 リーフィア・ローズベルト』

なにか拡声でもしているのか、やけに響く声が聞こえる。

俺ら新入生席の前方から、一人の女子生徒が立ち上がった。

白銀の長髪を流し、颯爽と歩く。背中に白い翼が見えることから、
セレスティア多分天使族であろう。

「あれ、学園長の娘だぜ？」

「そうなんだ？」

ワルサーの情報に頷く。ってかお前、商品をそんなに浪費して良いのか？

「・・・この小春日和に、私達は晴れてこの学園に入学する事が出来ました・・・」

ありきたりな文章を朗々と語るその女子生徒。

ワルサーも俺も、欠伸をかみ殺してその話を聞いていた。

あれ、そういえばアーシエは・・・

きよろきよろして探すも、見当たらない。

「アーシエ・クラルヴァインを探しているのか？ 情報料100ル
クだな」

「子どもの使いか！・・・まあいい。後払いで」

「毎度！」

俺が言うと、ワルサーはなにやらポケットから帳面を取り出した。

メツチャ黒い。びっしり文字が書いてある。

「彼女は18組出席番号2番だから・・・あそこだ。」

なんで他生徒の出席番号を把握している・・・？

そう心の中で突っ込みつつも、ワルサーが指差すほうを見ると、少しようとしたアーシェを見つけた。

「お前・・・何者？」

「言っただろ？ 情報屋だって」

あっけらかんと笑うワルサー。コイツは敵に回さないようにしよう。

下手したら社会的に抹殺されそうだ。

さて、そんなこんなで入学式は終わり、俺たちは教室へと戻された。

俺たちが全員席に着いたのを確認すると、アルファ先生はいろいろ手紙を配る。

時間割表なんかも載っている。なんだか新鮮だな。

「さあ、じゃあ今日はお仕舞い。明日からは授業になりますから、頑張ってくださいね」

先生の号令で、みんなゾロゾロ帰り出す。友達が出来た奴もいれば、出来なかった奴もいるようだ。

「ユーヤあ、居る!？」

扉を開けてアーシェが入ってきた。

俺が手を挙げると、こちらへ向かって歩いてくる。

「帰ろ」

「おう、じゃあなワルサー」

俺はワルサーに手を振る・・・が、なぜかアイツはアーシェの場所を当てたときに持っていた帳面を持って、こちらを観察していた・・・。
あ、100ルク払うの忘れた。

「あ、そういえば、見せてくれるよね？　アーシェ」

「え？　何を？」

アーシェとの帰路。まだお昼前ではあるが、特にこのあと用事もないので帰宅することにした。

「生徒証」

「あ・・・そういえば」

苦々しげな顔をするアーシェに、俺は笑って言う。

「約束だろ？　まあ嫌ならもう少し待っけど」

「・・・まあいいわ。はい」

アーシェは俺にカードを差し出した。

『

アーシェ・クラルヴァイン　12歳　ソーサラー　LV1

300 HP（体力）

699 MP（魔力）

98 STR（腕力）

101 DEX（器用さ）

134 VIT (防御力)
 107 AGI (敏捷性)
 608 INT (知力)
 598 WIS (精神)
 107 LUK (運)

どこまで俺と違うのか、自分のも出して見比べる。

『
 ユーヤ・ミナモト 12歳 精錬術師^{リファイニスト} LV1

128 HP (体力)
 789 MP (魔力)
 108 STR (腕力)
 403 DEX (器用さ)
 102 VIT (防御力)
 408 AGI (敏捷性)
 960 INT (知力)
 108 WIS (精神)
 578 LUK (運)

『
 …やっぱり俺に比べてWIS (精神) やらHPやらが高いな。

「なんでこんなに高いの隠してたんだよ」

苦笑する俺に、アーシェはうつむいて言う。

「だって、ユーヤのが凄いじゃん」

そんなことはまるでない気がするのだが・・・。

確かにアーシェは俺のINTのようにずば抜けた数値はないが、どれも高数値を出しており、かなりハイスペックだ。

「ソーサラーに必要な点は全部ハイスペックだ。これからLVアップもあるだろうし、自信持っていこうぜ。」

「・・・なんか励まされると余計に腹立つ～～～～！」

ぷっくうとむくれて、俺の背中をポカポカ叩いていた。

009 入学式（後書き）

普通教室棟6階・・・PC向け説明っつーか図byユーヤ（00〓
階段）

19・18・17・16・15・14・13・12・11・10・
09・08・07

廊下

20・21・22・23・24・25・00・01・02・03・
04・05・06

寮の図（板・・・看板。箱・・・四角い箱っつーかエレベーター）

2076・・・2100・板・2050・・・2026

廊下

2075・・・2051・箱・2001・・・2025

010 学園初日

アーシェと一緒に朝食をとり、俺たちは通学中。

確かに新鮮だな・・・学園生活、もしかしたら親父の言うようにとても楽しいものかも知れない。

鞆を肩にかけ、アーシェとのんびり歩く。

「アーシェのクラスはどうなんだ？」

「んー、まだ良く分からないけど、私の主席には影響出なさそう！」

ああ、そういやコイツ主席狙ってるんだった。

「そ、か。俺のクラスもそんな感じだよ。主席頑張れ」

「頑張るよ。まずは最初のテストだね」

「テスト？」

「うん、この学園には、年三回のテストがあるの。7月に第一回、12月に第二回、最後に3月の第三回。その合計で決まるのよ、主席」

うわー・・・めんどくさそ。

普通教室棟に着き、玄関を歩いて6階へと向かう。

「テストとか興味ないわ、アーシェ、俺の分もよろしく」

「何よソレ！ あ、でも留年しないようにね」

「留年！？ そんなのあんの！？」

「そりゃあるわよ、ま実技のほうでカバーしなさいね」

17組の前で、俺とアーシェは別れる。さて、今日から授業だ。

ガララ

俺が扉を開けて入ると、結構じろじろと見られていた。なんだ？

「おい聞けよユーヤ、面白い情報だぜ」

何か仕入れたのだろうか？

情報屋を営むワルサーが、嬉しそうに絡んでくる。

「どうした？」

「アーシェ・クラルヴァインだがな、彼女もう学園美少女図鑑に載ったらしい。そこで、一緒に登校してくるお前は嫉妬と羨望の的！」

うつわりすぎえ嬉しそう。

ついでになんだ、学園美少女図鑑で。

「なにを呆れた顔してんだよ。美少女図鑑ってのは、この学園の可

愛い子を網羅した非正規の書類でな。俺も手に入れるのに苦労したんだが・・・」

ずっと喋っているワルサーをつれ、自分の席へと向かう。

座った俺の目の前にワルサーは立ち、朗々とその話を披露する。

「というわけで、お前の素性もしらずに、絡んでくる奴がいるかも知れないから注意しろよ」

どういうわけだ。

にしても、アーシェ確かに可愛いからな。仕方ないかも知れない。

そうこうしているうちに、アルファ先生が入ってくる。

「はーい、H R始めるよ」

さて、せっかく学園に来たんだ、生活を楽しみましょう！

一時間目の授業は、“冒険基礎”だった。

いかにアイテムが大切に始まり、素人冒険者の失敗事例や油断の恐ろしさ、警戒するべきモンスターについての話が続く。

正直俺は親父にほとんど叩き込まれていたので、面倒なだけであつた。

「ふう。なんだかなあ」

ため息をつく。

前に立つ初老の男性教師は、教室の中ほどにいる生徒を立たせて質問をしていた。

「じゃあこの問題だ。警戒するべきモンスター、リラ森林の“オーガヘッド”は、どの属性に弱い？」

立ち上がった生徒はしどろもどろだ。確か彼は魔法使い系だったはず。おいおい魔法使いは答えられなきゃまずいだろう。

「え……と……分かりません」

「正解は光と水だ。座りなさい。……いいみんな！ このように弱点というのはかなり重要な要素になる。これから頑張っていくように！ じゃあ次を……ワルサー・ステイングル」

「はい？」

眠たそうに後ろで立ち上がる音が聞こえる。まあコイツは大丈夫だろう。

「弱点を攻められない、またはそのモンスターに関する弱点を知らない場合はどうやって攻撃する？」

「無属性か物理攻撃」

「正解だ。だが物理攻撃が効かない、という場合もあるから気をつけろ。……まあ諸君にはまだ早い相手だが」

はーい先生、戦ったことあります。ジャイアントスパイダと戦いました、物理攻撃効かなくて大変でした。

しかも、群れでした、死ぬかと思いました。

心のなかで、過去に戦ったチート野郎を思い出す。

クモみたいだけでキモいのにな、物理攻撃効かないとかアホだろマジで。

「さて次は・・・」

そんな感じで、授業は続いた・・・。

休み時間。

「なあ、お前飯どこで食うの？」

ワルサーが後ろから突っついてくる。それ地味に痛いからやめろ。

「弁当作ってねえから食堂じゃん？」

「お、マジか。一緒に食おうぜ！」

「・・・アーシェ次第だな。アイツがどうかによるわ」

「じゃあ昼休みに隣行くか」

この学園は、基本2時間授業の後ちに昼休み、そして午後に1時間の授業を経て終了となる。

1時間の長さは90分。まあ長いっちゃ長いな。集中力持たないし。

そんなこんなで2時間目。

2時間目は、“フィールド基礎”

おばさん先生だった。

「いいかい？ フィールドにはそれぞれ気候があるからね。冒険に行く際には、必ずその条件にあった服装、アイテムを忘れないんだよ？ 今日はそのような授業だ」

気候、ね。マジ“火山”系は死ぬぜ？ 暑いし火の粉かかるしドラゴンいるしシャレなんねえ。

もうキツイのなんのって。

「まず、この辺り、インクアイリ学園があるフォルセナ王国はほとんど平和なフィールドさね。“森林”“森と丘”“街道”“荒地”・・・難易度は低いが、ボスモンスターには気をつけなよ。フィールドにはたまにボスモンスターが出現する。君達じゃあまだ太刀打ちできないからね」

はいはい。フルメタルハガーとやり合いましたあ。荒地のボスですよね？死ぬかと思いましたあ！

「お前・・・苦労してるな・・・」

「あれ？ 聞こえてた？」

「ああ、さっきのジャイアントスパイダのクダリも、多分周りの席の連中はみんな聞こえてたぜ・・・哀れみか畏怖か・・・まあそういう視線をお前にぶつけてた」

「マジかいな」

ワルサーのため息をバックに、俺は授業を聞くことにした。

昼休み。

「やっと終わったな。結構辛いぜ授業ってのも」

ワルサーが隣で伸びをするのを見て、俺は苦笑する。

「まあ、楽しいかな、俺は」

「マジかよ。まあいいや、飯行こうぜ飯」

「おう」

17組を二人で出る。

隣のクラスの扉を開けると・・・

「あゝ・・・二人で行こうぜ？ ユーヤ」

「そうだな」

沢山の女の子に囲まれて人気者と化したアーシェがいた。

「俺ら飯食い行くから！」

俺が声を出すと、クラス全員が振り返る。

・・・なんか怖えな。

そんな中アーシェは俺たちに気付くと笑って、

「分かったあ！　じゃあ帰るときにまた行くね！」

「おう」

取り巻きの女の子たちの視線がなにやら痛かったが、俺らはそのまま食堂へと向かうことにした。

「あの人、だれ？」

「アーシェちゃんの友達？」

「ちょっとカッコイイかも」

アーシェの周りで口々に言う少女達。

会話には絡んでいないが、クラスの男子連中もアーシェたちの会話を耳を^{そばだ}敬^{そはだ}ている。

「そうだよ。私のPT」

微笑んで言うと、少女達はうらやましそうに。男子は残念そうな、嫉妬を絡めた表情をする。

「PTって、どっちから申し込んだの？」

一人の少女の問いに、アーシェは少し頬を赤らめて・・・

「わ・・・私から・・・だよ」

「うっそ〜！」

「キャーー!!」

少女特有の高い声で、教室内は染まる。

12歳といえど、女の子に色恋沙汰は絶えない。

「ねえ、その彼とアーシェちゃん、どっちが強いのか？」

「まだまだ、色んな意味でユーヤには勝てないな」

（名前呼び！！！？）

教室内の総意がソレだった。

少女たちは顔を赤くしながら、聞く。

「色んな意味って？」

「うーん、戦闘中の冷静さとか・・・頼もしさ？」

「すごいね、ユーヤくん！」

ユーヤの知らないところで評価がうなぎのぼりだが、それがこの後嫉妬を呼び、面倒なことになる。

ズルズルっ

「ユーヤ、お前ソレ何杯目だ？」

「ズルズ・・・ん？6だが？」

「はぁ、どんだけ食うんだよ」

食堂はわいわいがやがやと、昼休みの賑わいを見せている。そんな中、テーブルに5つのどんぶりを重ね、さらにもう一杯のラーメンを食っている俺がいた。

「いや、大好物ですよ。まさか学食にあると思わなかったっていうか、うん。ズルズル・・・」

「そか。お前さ、PTとか組んでんの？」

「ズル」

「食いながら返事すんじゃないよ！・・・まあいい。アーシェちゃんか？」

「ゴクゴク・・・」

「・・・お前、もう麺食い終わったのか」

「・・・ふう、ごちそうさん。んで、ああそうだよ。アーシェだけだな今のところ」

俺がどんぶりをさらに重ねると、ワルサーはため息を漏らして言った。

「そうか。さっき情報が入ってな、俺たちは3年生までにPT組んでおく必要があるらしいからな」

「ふうん、そういうワルサーは？」

「俺か？ 俺のPTは別名“瞬速”、完全にAGIを高めた諜報部隊。もう6人揃ってら」

「・・・なんかお前やりそうだな、そういうの」

「まあな。それで、3年生の夏に6人揃っている必要があるらしいぜ」

6人か。そういやマックスは6人だったな。ワルサーは楽しげにそう言っている。

「なんで、3年の夏なんだ？」

「よくぞ聞いてくれた！ 3年に一度の祭典、“インクアイリ武闘祭”があるからだよ」

なんか・・・まためんどくさそうな名前だな。

「1年生は参加自由らしいんだが、2年生以上は絶対だそうだ。この学園の頂点を決める、そういう祭典だ!」

なんだか、それその時の6年生有利じゃね?

まあいいけど。

「なるほどね。そういやさ、PTって学年関係あるの?」

「ん? ねえよ? 実際俺のところも1年2人、2年1人、3年3人のPTだからな」

ふうん。まあ先輩を取り込むことはないだろうが。

後輩ってのは少し考えられる・・・か?

まあいいさ。

「ま、俺らは先輩とか取り込まねえよ。それで、午後の授業は?」

「ん? と・・・実技だ。多分校庭集合だな、一緒に行こうぜ」

「おう」

俺たちは席をたち、普通教室棟を出る。んでそのまま職員棟を右に曲がって、校庭へと降りる階段を進む。

「・・・もはや、砂漠のフィールドだよコレ」

「ああ、そういやお前、全部のフィールド回ったって言ってたよな。それスゲーよ」

「まあ、全部じゃなくて一通り、だけど。だから、火山は火山でも、バル火山とかは行ったことない」

「・・・なるほど。お、結構もう居るな」

「よし、行くか」

3時間目、実技訓練。

「はい、お前ら集合!!」

良い感じに日焼けした、青年体育教師が叫ぶ。

うん、叫ばないと多分聞こえない。

わらわらと、17組メンバーが集まってくる。

「じゃあ今日は、戦闘訓練の初歩を行う。実技訓練担当、召喚士のアドラーだ。よろしく」

よろしくお願いします、と、元気の良い声でみんなが答える。

俺とワルサーとか数名は、ダルそうにしていたが。

「さて、では簡単な格闘訓練だからな。職業特有の技を使わず、素手^{クラス}でしとめてもらおう・・・ええーつと、ユーヤ・ミナモト!」

いきなし俺かい・・・素手とか、あんまり強い奴相手じゃなにもできねえぞ?

「召喚 我が望むは己が体、今その姿を我に顕せよ ラビット!」

・・・

「瞬殺してこい。あの教師の度肝抜いてやれ」

さも面白そうに、俺の隣で笑うワルサー。

いやそれにしてもラビットってオイ・・・なんだこのヘタレ授業。

「早くしろユーヤ・ミナモト、恐怖があっては、立派な冒険者にはなれないぞ」

いや、恐怖っつーかなんっつーか・・・むしろこの教育に恐怖っスわ。

仕方なく、俺は一つ目鬼、ラビットに近づく。

そして、一瞬でしゃがむと間合いを詰める。

多分、俺の残像が残っているだろう。

そしてそのまま、ラビットの首筋に手刀を叩き込んで気絶させた。

所要時間、0.1秒。

「ぷくく・・・」

ワルサーは必死で笑いを堪えているが、他の生徒や教師は啞然・・・。

「ああ、お前そっち側か・・・いや、見事だった。お前に頼んだ俺が間違っていたな。周りの教育にならないよ」

「すみません」

とりあえず謝っておく。

少し申し訳ないが、他の生徒と足並みをそろえると、何も分からないラビットをいきなり殺す事になる。

召喚された上いきなり殺されるのは不憫だった。

いや、デスベアーのように襲ってくるのは別だが。

「霧散 己が郷へ帰りたまえ」

教師が唱えると、ラビットは気絶したまま霧散した。

もちろん死んだのではなく、元居たところに帰っただけのことだ。

召喚獣は召喚されたその場で殺されると本当に霧散するため、可哀想ではある。特にラビットのような、非好戦的な生物は。

デスベアーは異次元の存在であるため、元居た場所などは無いらし

いが。

「さて、では今のように間合いを詰める速度が大事だ。こちらがダメージを食らわないように倒すのだぞ。では、実技訓練開始！」

体育教師の合図で、午後の授業が始まった。

俺が遠めに他の生徒が戦う様を見つめていると、ワルサーと教師・・アドラーと言ったか、先生がこちらに向かってきた。

「キミとワルサー・ステイングルは次元がちよっと違うようだな。実技訓練の単位は、正直もう合格の域に達している。・・・まあ、毎年居るんだけどね、キミらみたいに桁外れの奴って。そういうの、“そっち側”って呼んだりもするんだよ。それで本題なんだが、キミらは実技訓練の時は来てもこなくても構わない。実技テストをやる時には連絡するから」

「・・・それはつまり、単位は認定？」

教師はその言葉に大きく頷く。

「学園長の教育方針でね、こういった授業は生徒のやる気次第なんだ。キミらをここに縛っていても、学習意欲がそがれるだろう？だから、こういう処置。多分、今年も1000人中2、30人はいるよ」

なるほどね・・・でもその間どうしようか。

来てもこなくても良いのなら、来るっつー選択肢もあるしな。

「ワルサー、どうする？」

「ん？ この時間は俺とユーヤで適当に潰しやいいんじゃないか？
まあ、この授業の毎に考えようぜ」

「そだな」

実技訓練が終わり、帰りのHR。

こういうのが日常になるのか。なかなか面白いな。

「はーい。では帰りのHRをして、下校ですよ」

相変わらずなんだかほわほわした担任、アルファ。

この人大丈夫かな？ まあ強いみたいだけど。

「ああそうそう、連絡がありまーす」

アルファ先生がそう言った途端、背中をシャーペンでつつく奴が1人。

「・・・なんだ？」

「その連絡事項、俺は知っている」

「いや、今から言うだろ」

「まあそうなんだけど、なかなか面白い話だぜ？」

会話を小声で交わし、先生のほうを向く。

「“バトルボール”の参加者を募集しているみたいです。次のテスト、実技の上位20名が自動的にそうなるみたいですよ。まあ、最初の集まりは来年の3月・・・進級間近のようですけど・・・上位20名に食い込みそうな・・・キミらとかは特に考えてくださいね？」

めっさこっち向いて言われた！？

ってかバトルボールってなんじゃい。

「じゃあHR終わり！ はい、明日も頑張っていきましょう！！」

その一声とともに、段々と減っていく生徒たち。

「ワルサー、バトルボールってなんだ？」

「・・・？ お前、それも知らないのか。球技だよ球技。冒険者界における最大の競技だろ！」

「いや・・・知らん」

俺が言うと、ワルサーは「座れ」と俺を促し自分も正面の椅子に座った。そして間にあったテーブルの上にノートを広げ説明を始める。

「いいか？ バトルボールに参加できるのは、各学年の成績優秀者だけだ。そいつらが切磋琢磨して得点を競う。来年から、別の学校との対外試合や、他学年との練習試合もあるからな。2～6年生が参加できる競技だよ」

ほお。なかなか楽しそうだな。代表か。

「ちなみに俺が仕入れた情報によると、お前の親父と学園長が居た代が歴代最強らしくてな。その2人がエースストライカー張ってたらしいぜ？」

「ストライカー？」

「そうそう。まず簡単な説明から行くと、試合時間は20分2本。

「一個のボールを奪い合って、相手の守るゴールに入れるんだ」

「ふうん、奪い合うためには何をしても？」

「構わない。だが、職業^{クラス}に見合った闘いをしなくてはならない。魔法や、所有武器、職業^{クラス}の力を使うことは許されている。んで、そのボールの大きさはだいたいアレだ・・・そう一抱えくらい。んで、それを投げたり蹴ったりして相手のゴールに放り込む。ゴールの大きさはだいたい縦に人1人、横に人3人くらいだ。そこにボールを放り込めればなんでもあり。もちろんけが人はいつもたくさんでるけど、ファンは滅茶苦茶多い競技だ」

・・・凄まじいな、その競技。

「それに、出ると？」

「ああ、かなりの名誉だぜ？　ちなみに歴代最強の代は2年の頃から無敵だったみたいだ」

「へえ・・・面白そうではあるな」

「だろ？　んで、最後にポジション。フォワード、ガード、センターの3つだ。」

フォワードは、お前の親父や学園長がそうだったポジションで、とにかく攻めまくれ！点とれやボケえええ！！　ってところだ。

ガードは、冷静にゲームの流れを把握し、いかにこちらをサポートし、向こうを妨害できるか、いわば司令塔だな。

そんでセンター。これは守りの要だな。ディフェンスに命懸けてるようなポジションだ。絶対にゴールを守る。それが役目。

まあ、どのポジションの奴がどこに行こうが、誰が点を決めようが

構わないが、まあだいたいフォワードが点取るな。1チーム8人だ。フォワード4人、ガード1人、センター3人。これはルールだから変えちゃいけない・・・何か質問は？」

楽しそうだな・・・マジで。いや、本当にやりたいかも。

「条件は、実技で20位以内だったよな？」

「ああ。俺の仕入れた情報では、2年以降テストごとに入れ替わる可能性があるらしい。常に実技テスト成績上位20名を取るからな。楽しみだぜ」

ガララ！

「ユーヤ！帰ろ！」

「迎えがきたな。じゃあな、ユーヤ」

「おう、また明日」

俺はワルサーに別れを告げ、アーシェとともに教室を出る。

「なんの話してたの？」

「バトルボールの説明受けてた」

「ああアレ！？ 私も出たいんだ！一緒に頑張ろ！」

「ああ」

頭の後ろで手を組み、俺はのんびりと答えていた。

010 学園初日（後書き）

ワルサーの職業詳細^{クラス}

AGIに突出し、投擲武器や罠^{トラップ}を使用した戦闘を得意とする。
PTに1人いると、フィールド内に張られた罠の解除や、潜む敵の
感知もできるため非常に助かる。

盗賊

←

シーフ↑今ココ！

←

ニンジャ

←

アサシン

←

???

011 校外学習 前編

バゼラート暦1206年05月09日

入学から一ヶ月が経った。

俺は相変わらず学校生活を楽しんでいる。

ワルサーは適当に学校をサボる不良と化し、俺とは良い悪友だ。

アーシェはいつも勉強頑張っているけど、ご飯を俺のところに食べに来るのは相変わらずだし。

さて、今はそんなこんなで昼休み。

寮近くの原っぱで、のんびり昼寝を堪能していた。

「あゝ、良いわあ・・・」

ごろりと寝返りを打ち、大の字になって青空を見つめる。

今日は実技授業のため出る必要が無い。ワルサーは面白い情報が入ったらしく奔走中で、俺は今日一人だ。

すう・・・。

初夏の心地よさってもう素晴らしいよな。

新緑が木漏れ日を彩り、その木陰で・・・。

そうだ、木陰で本を読もう！

そう思い立ち、俺はぴょんと起き上がった。

確か普通教室棟の一階には図書館もあったはず。

面白い本もあるだろう。

尻についた芝を払い、普通教室棟に向かって歩き出す。

「ふう、今頃みんなは授業中か・・・」

職員棟の南側を通ると、校庭で訓練をするクラスメートがよく見える。

そのまま普通教室棟へと向かうのだが。

図書館、か。

集落に居た頃、図書館は俺にとっての世界だった。今ある知識や、妙に俺が冷静なものも図書館で吸収した知識が俺を守っているから。

図書館は俺にとって、特別な存在であった。

普通教室棟のエントランスホールを抜け、図書館へ向かう。

『図書館』と銘打たれた吊り看板を見つけた。

「ここか・・・」

ガラスで出来た扉を開こうと手を伸ばしたその時。

「ああゝ居た居た！ ユーヤ！！」

んあ？

後ろから早歩きで来たのはワルサー。

俺の手首を掴むと、辺りをきよろきよろと見回して近くにあった男子トイレに俺を引き込んだ。

「おい！ なんだよちよつと！」

「黙って着いて来い！」

いつになく真剣なワルサーに一瞬気圧されるが、男子トイレに引き込まれたところでやっと、手を振り解いた。

「なんなんだよ！」

狭っ苦しい手洗い場で、俺とワルサーは対面する。

すると彼は人差し指を立てて・・・

「ヤバい情報が手に入った」

とだけ言った。アバウトすぎるだろオイ。

「なんだ？」

「明日、校外学習なのは知ってるよな？」

ああ、確かそうだった気がする。まだPTを組んでいない奴も居るだろうからと、今回は基本単独行動の校外学習になるとかなんとか・

「1組のPT、“豊穰の女神”と、13組のPT、“ベオウルフ”が激突するみたいなんだよ」

どっちも知らねえよ。

だが、今回のワルサーの声色は真剣そのもの。最後まで聞くことにした。

「そこで、まあ経緯いきさつはまだ調べられていないんだが・・・」

ちらっと俺のほうを確認してくるが、生憎俺には何もわからねえ。

だが、めんどくさそうだとは理解した。

「・・・それで？」

「そう、それで。“豊穰の女神”のリーダーはアレだ、入学式の時話したアイツ。学園長の娘、リーフィアだ」

そういえば。白い髪を腰まで伸ばしてた、セレスティア天使族の子だ。

「彼女はほとんど単体で強い。“豊穰の女神”のメンバーは正直ただの取り巻きってところか」

「それなら、さっさと一人で片付けりゃいいじゃん」

俺が言うところワルサーは頷いて言った。

「と、思うだろう？　だがそこで問題なのが“ベオウルフ”のPT性質だ」

「どんな？」

「悪質なんだよなあ。PT人数は5人。それもなまじ学力は優秀らしくてな、他の生徒を調べて、実技だろうが筆記だろうが、自分達より有能なヒトを潰しにかかる傾向がある。んでその悪質さなんだが・・・召喚士3人、幻術師1人、念力者1人の構成なんだ。お前なら、この意味分かるだろう？」

・・・なるほど。

要はえげつない戦い方をするわけだ。

幻術を使ったり召喚獣で戦わせたり、念力を利用したり・・・。

無論それが卑怯なわけではないが、敵にすると厄介だ。

「・・・それにしても、有能なヒトを潰しにかかる、か」

妙に引っ掛かるな。

まあいいか。とりあえずは・・・。

「理解はしたが、俺に何を求めてんだ？ 情報をわざわざ提供した意味あったのか？」

俺が問いかけると、ワルサーは苦笑して言った。

「ハハハ、おいおい。せっかくダチのよしみで教えたんだ。とばかり喰らわないようにしろよってだけの話だよ」

「そ、か」

バゼラート暦1206年05月10日

「はーい皆さん集まりましたねー？　これから1学年全員で、“モールスの森と丘”に出発しまーす！」

まったり系幻術師教師が全員に声をかける。

「なんでアイツが学年監督してんだ・・・？」

「さあ？　私に聞かれても困るわよ」

校庭。俺たち第1学年は今、引率教師陣の前に整列して点呼をとっている。

突き抜けるような晴天は、まさに絶好の冒険日和だろう。

まだPTを組んでいないヒトもいるためか、今回はPTでの行動を強制しているわけではないらしい。

俺はとりあえず一緒に居るアーシェと、PTメンバーがだいたい上級生のワルサー、そしてワルサーのPTメンバーで唯一の同学年という少女リーア・アルスを含めた4人で行動することとなった。

ちなみにリーアはアーシェの同級生でもあるらしい。奇遇って、続くものだな。

「んでワルサー、昨日話してた連中の動きはどうよ？」

「あ？　ああ、どうやらまだ動かないみたいだな。だが、どこかで戦闘になることは確実だ。下手すりゃ死人が出るかも知れないとい

う話を部長から聞いてな・・・」

ワルサーが言葉を選ぶように口ごもると、リーアが隣から事情を説明してくれる。

「そうなんだよ！ 結構デカイ闘いになるってのが部長の考えでさあ、私達はその見守りっつか監視役をまかされて、二人だけじゃ心細いってことで・・・」

「わーーーーー！」

「・・・なによワルサー」

ちよつとまって？ リーアが言った事、ワルサーが昨日話した内容とこじれてないか？

「コホン、ええーつと。とりあえずそうだな・・・スマンユーヤ！！！」

・・・状況を把握しよう。

とりあえず、だ。俺はただ単に一緒に行動するだけじゃなく、こいつらに付き合っつてその戦闘を見守らなきゃいけないって。

「・・・ワルサー、テメエ」

「すいまっせんしたあ！！！！」

まあ、別にいいっちゃいいんだけどな。リーアっていう青髪をポニーテールにした少女のほうを向くと、彼女は啞然としていた。

「ワルサー、説明してなかったの？ 危険な任務になるから承諾を得ろってあれほど・・・」

「・・・まあ、なってしまったモンは仕方ない。それで、さつきから出てくる部長って？」

「あ、ソレ私も気になってた」

アーシェも会話に参加する。移動が始まったので、南門に向かって歩きながら話を続けた。

「ああ、俺の部活は、沢山のPTで成り立ってんだ。よくあるぜ、そういうの」

「そう。私たちみたいなシーフやレンジャーといった職業を集めて、部活にしているのよ」

「へえ、どんな部活？ 私部活とか興味あるなあ」

「私立インクアイリ学園特別情報収集兼人為的流出用秘密諜報人員育成機関、略して文芸部」

「どこにも文芸っていう要素なかったよね！？ 凄まじく文芸の意味履き違えてるよね！？」

アーシェが激しく突っ込むが、ワルサーとリーアはどこ吹く風。

「別に、いいじゃない。言い易くなってんだしい」

「まあ、そういうことだ」

・・・俺も突っ込みたい気持ちはある。あるぞアーシェ。

引率されて歩く道。その道端には、ヒトが5、6人は入れそうな大きさのカプセルがところどころに点在した。

「このカプセルみたいのはなんだ？」

俺が問うと、リーアが答えてくれる。

「それはあ、ワープゾーンってのが一番しっくり来るかな？ 実習に使いそうな簡単なフィールドと学園を結んでいて、校外学習の時に移動しやすいようになってるの」

・・・ほお、ずいぶんと画期的なものだな。

にしても、5、6人ずつ運んだところで、1000人を運ぶにはかなりの時間がかかると思うんだが。

「こんなの使うと時間かからないか？」

「まあ、そうよお。でも今回みたいに学年で動く場合はあ・・・」
リーアがそう言葉を繋ぎながら、正面のほう、それも遠くを見据える。

その視線を追って見てみると、なんだか、デカイ鉄の箱がいくつも連なってできた機械？ のようなモノがたたずんでいた。

「おいおい、なんだよアレは・・・」

「鉄道、と呼ばれる移動機関だね。1000人だろうとあつという間に運べる、浮遊魔術と風系魔法を駆使して作られた機械だ」

ワルサーが教えてくれる。・・・なるほど、鉄道ね。

確かにそんな名前がしっくり来る。見るからにずっしりと重たく、黒金色に鈍く輝くボディは、この上ない存在感を示していた。

先頭のほう・・・1組や2組は次々にその鉄道へと乗り込んでいるようだ。

「さ、初の校外学習楽しんでこーぜ！」

ワルサーのさも楽しそうな表情は、これから起こるらしい抗争など微塵も連想させないような笑みだった。

012 校外学習 後編（前書き）

用語集をちよろつと

マッピング・・・冒険者が、未開のフィールドで行う常識的行動。
フィールドの地図や情報を事細かに書き込むことで、次に来た時の
冒険をやり易くする。

012 校外学習 後編

カタンカタン……

鉄道の乗り心地もまた良いものだ。

今俺たち4人……俺・アーシェ・ワルサー・リアは、4人席、
というのだろうか。俺とワルサーが進行方向に向かって座り、その
対面にアーシェとリアが座っている。

窓から流れていく景色はいつまでも長閑^{のどか}で、行く先である“モール
スの森と丘”という悠久^{フイールド}の自然がさぞ気持ちの良いところであるか
を連想させる。

「……さて、この校外学習って、表向きには何をするんだ？」

「ユーヤアンタ……何も先生の話聴いてなかったの!？」

俺の一言に、アーシェがツツコんだ。

いや、聴いていたと思うのだが……なんていうか、ね。思い出せ
ないんだな。

そんな俺に、ワルサーがため息を一つ。

「今回は“フィールド”そのものに慣れる訓練のようなものらしい。
それで、実技訓練の授業を免除されている者、またそのPTの者は
自由行動になってるみたいだ。指定時刻までに戻ればいいといわれ
ている。それは俺とユーヤはもちろん、アーシェちゃんとリアも

だ」

そういえばアーシェも免除組だったな。この前言ってた気がする。

「あ、じゃあ今回はフィールドで自由行動ってことか。モールズの森と丘・・・行ったことないし、マップピングしてみるのもいいかな」

隣でワルサーが説明してくれる。俺はそれに相槌をうちつつ、マップピングを提案した。

もっとも最初の学年の最初の校外学習で行く場所の情報など、学園側が完全に網羅していると思うが。

「それでさあ、私たちは自由行動なんだけどお、とにかく“豊穡の女神”を追跡しようかと思ってるの。それでいいかな？」

「私は平気よ？　でも、追跡してどうするの？」

アーシェの問いはもっともだ。俺もそこは聞きたい。

「どちらかが死にそうになったら、止める。このメンバーなら、両方のPTを相手にしても平気なはずだ」

どっからその自信が出て来るんだよワルサー。

「んじゃ、適当に役立ちそうなものでも考えとくわ」

「お、任せたぜ精錬術師」
リファイナー

くモールズの森と丘く

入り口は最初から二つに分かれていた。

そのまま森に入る道と、少し上り坂になっていて、丘の方角に向かう道だろう。

ついでに言っておくと、最初1000人が鉄道から降りて整列した時に、30人ほど名前が呼ばれて自由行動の許可が出ている。

それ以外の生徒は先生に引率されて“フィールド”そのものを知る訓練をするらしい。

俺たちはワルサーの先導で、“豊穣の女神”に気取られないよう尾行を続けていた。

森と丘のフィールドは、別の場所ならば行った事が結構ある。

6歳になったばかりの新米精錬術師リファイニストだったころは、こういうフィールド自体に害が無いフィールドで冒険していた。

さて、その俺が行ったところとココの違い。それは、モンスターが比較的イヤらしい攻撃をしてこないことだろう。

なんどか今までにモンスターと戦闘になったのだが、簡単な物理攻撃、それも打撃系統がほとんどで、状態異常攻撃や切断系統の攻撃を全くしてこない。

ダメージは学園近くのリラ森林に出てくるようなモンスターと比べれば桁違いだが、それだけだ。

アーシェがちよっと回復すれば、それだけで全員上限マックスまで回復してしまう。

サスガはソーサラーって感じだな。

あ、ちなみにリーアの職業はレンジャークラスだった。

弓を主に使用し、罠を仕掛けるスペシャリスト。

その系統の2段階目で、先ほどのまでの戦闘を見る限りは中々の手練だ。

「・・・まだ接触はしないみたいだな」

ワルサーが呟く。現在森の中を進んでいるのだが、“豊穰の女神”は未だ“ベオウルフ”とは衝突していないみたいだ。

「絶対に戦場を決めて戦いはじめると思うんだが・・・」

どうやら自分の情報に疑問を持ち始めたようである。まあ、知らね。

その“豊穰の女神”のPT構成だが、特筆すべき実力者だという学園長の娘、リーフィア・ローズベルトは背中に槍を背負っていることから、槍使い系の職業である事が伺える。

そのほかに、帯剣をした男が2人。杖を持った男が1人。ふむ、4人PTなのか。

「それにしても、“豊穰の女神”という割に、女の子1人なんだな」

俺が呟くと、ワルサーがフォローを入れてくれる。

「そうだな。だが情報によると、リーフィアの職業名から取った名前らしくてな。あ、他の3人はリーフィアの取り巻きのようだ」

取り巻き、ね。間違っても俺はそんな風になりたくないな。

鶏口となるも、牛後となるなかれ・・・ってな。

まあ鶏口じゃなくても、みんなでわいわいやればそれでいいけれど。

「お、森を抜けるな」

ワルサーの言うように、森が急に開け、目の前には草原がさわさわと風に流れていた。

「・・・！ おい、どうやらここが決闘場らしいぜ」

そう言ってワルサーは、俺たち3人を草陰に呼ぶ。

4人揃って、草陰から戦闘を見守ることにした。

「じゃあちよっと、見張り用の精錬道具でも作りますか」

「？ 何するの？」

「まあ、全てを見通す道具、かな」

アーシェの問いに答えつつ、俺は皮袋をがさごそかき回す。

「あった」

“レミールの瞳”と“マジックミラー”を取り出し、精錬することにした。

「リファイン
“精製”」

「すごい、綺麗だね」

球状の純物質を見て、リーアが感嘆の声を漏らす。

「そういえば俺も、ユーヤの精錬術を見るのは初めてか」

クラフティング
「練成」

2つの物質をあわせ、混沌^{カオス}を作り出し、そのまま両手で押しつぶす。

「精錬・レミーラの魔レンズ」

輝きとともに俺の手元に現われたのは、小さな虫眼鏡。

「・・・これが、何の役に立つんだい？」

「これを通して見ることで、相手のアクションが全て分かるようになる。例えば、リーアが罠を張ったりしたらすぐに分かるわけだ」

「へー、すごいねー」

目を輝かせるリーア。レンジャー系統が使う罠も、このレンズを通せば丸見えなのだ。

「・・・どうやら到着は“豊穰の女神”が遅かったようで、“ベオウルフ”と思しき怪しげな5人組は既にそこで待っていた。

召喚士だろうか、制服の上から緑色のローブを纏った男が、口を開く。

「わざわざ潰されに来たんだ？ ご愁傷様」

「僕らの出世の邪魔なんでね、排除させてもらうよ」

「あら？ わたくし貴方がたごときにやられる理由は無くってよ？」

・・・リーファイアって子、口調がかなり高ビーな気がするが。

す・・・と彼女は槍を構える。改めてみるとかなり長く、先端も鋭利だ。白い髪と対照的な、漆黒の槍が晴天に輝く。

「バアカ。お前らはここに来た時点で、幻術にはまってんだよ」

召喚士の隣に居た、前髪で瞳が見えない怪しげな男がそう笑った。

ソイツが幻術師のようだ。

「ツツ、卑っ怯だなあ、おい」

ワルサーが隣で憎憎しげに幻術師を睨む。と、同時に、“豊穰の女神”側の剣士が二人とも錯乱状態に陥った。

「うわあああああ！！！！ 来るなくなるなくなるなああああああ！！！！」

「ひひひひひひ！！ 死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！！！！！！」

彼ら2人が幻術にかかってしまったようだ。

狂ったようにその場で剣を振り回すが、それを見て“ベオウルフ”リーダーらしき召喚士の後ろにいた2人の召喚士が呪文をつむぎ始

める。

「我が望むは己が体、今その姿を我に顕せよ ブラッドデーモン
!!!!」

「グギャアアアアアア!!!!」

2人の目の前に魔方阵が現われ、そこから這い出るように1体の異形が現われる。

鋭く伸びた指からは延々と赤い血が滴り、目は落ち窪んで存在するかどうかも分からない。

ブラッドデーモン・・・デスベアーと同じく異次元の住人で、かなりの魔力がないと呼び出せない上級召喚獣。

この場合はおそらく、2人の召喚士が魔力を共有して必死に1体を召喚したのだろう。

「グギャアアアアアア!!!!」

この世のものとは思えない叫び声を上げながら、ブラッドデーモンは錯乱している剣士2人に迫る。

・・・が。魔レンズを通して見ると、面白い事が分かった。

「なるほど、リーファイア・ローズベルト、彼女は竜騎士系統の職業^{クラス}らしい」

俺が納得して呟くと、アーシェとリーアがハテナを浮かべて俺を見

た。

俺は小さく「見ててみ」とだけ言って、戦場に目をやるよう促す。

ブラッドデーモンが1人の剣士を屠ろうと鋭い爪を振りかざした時、リーフィアは既に地上には居なかった。

剣士に指が触れるかどうかというところで、空から槍が降ってきてブラッドデーモンを貫いたのだ。

リーフィアは天使族特有の翼を使って空を飛び、上空から槍を突き立てた形になる。

「グギヤアアアアア!!」

先ほどの威勢の良い声とは違い、断末魔とともにブラッドデーモンは消滅する。

リーフィアは槍を一振りして、剣士を一瞥した。

錯乱状態がまだ続いていることにため息を吐くと、槍を召喚士のリーダーに向ける。

「な・・・そんな・・・」

「僕達の召喚獣が・・・!」

当の本人達・・・つまり召喚士2人は揃ってアホ面。まさかブラッドデーモンがやられるとは思っていなかったのだろう。

「わたくしに挑むのは、少し早かったのでは？」

言うが早いか、リーフィアは槍を真っ直ぐ“ベオウルフ”のリーダーに向け突進する。

彼は舌打ちして後ろに下がる。

すると、今までリーダーの後ろに居た男が、ニタリと笑った。

・・・！？

「まずい！」

思わず呟く。“ベオウルフ”は1人隠し球を残していた。そう、念力者。

彼は念力で、ヒトではなくフィールドに干渉する職業だ。クラス俺の魔レンズが正しければ今あの念力者はリーフィアの突進の軌道上に落とし穴を作っている。

・・・それも底に毒を塗った檣床を敷いて。

「殺す気かよ！？」

「どうしたのよユーヤ！」

アーシェが言うが、気にしない。

俺は急いで草陰に隠れたまま精錬術を行うことにした。

何にしようか。氣導砲の類を放って完全に潰してもいいが、あちらも生徒らしいからそれはまずい。

だからといってひっそり罠を潰せるかといえば・・・あ、あったわ。

皮袋を漁り、中から“へきちじゅ僻地球”と・・・

「待て、ここは俺がやる！」

「お？　おう・・・」

「アレは地面に罠を仕掛けているな・・・よし！」

・
ワルサーが俺を制して立ち上がると、両腕をクロスして力を込め・・・

・
バサ！！！！

「な！？」

驚いた、背中からセレスティア天使族なんて目じゃないほどの大きな翼が生えたのだ。

そしてそのまま大きく羽ばたき、上空に舞う。

「撒き菱」

数個、尖ったブービートラップを地面に投げつけた。

するとその部分に急に穴があき、落とし穴があらわになる。

「なに!？」

念力者は驚愕の表情だ。それはそう、いきなり罨が見つかってしまったのだから。

それを見た豊穰の女神メンバーは驚くも、リーフィアは寸でのところで急停止して事なきを得た。

「ただ今」

ゆっくりと草陰に舞い降りるワルサー。少し見直したかもしれない。

「シーフ舐めんな。バレずに罨撤去してやったぜ」

やり遂げた笑みを隠さないワルサーを横目に、俺は戦闘のほうへと向き直る。

「さて・・・どうなっているかな？」

俺が見たときにはもう、阿鼻叫喚の図が広がっていた。

「・・・くそ! 覚えていやがれ!!!」

ありきたりなセリフが聞こえたと同時に、リーフィアの影が俺たちの前を横切る。

殺されかけたことを知ったリーフィアが暴走したらしく、罨を仕掛けた念力者はもはや虫の息。血だらけでぼったりと倒れていた。

他の、ブラッドデーモンを呼びつけた2人の召喚士も同じく、リーフィアの滑空術と槍捌きの餌食に。

幻術師と召喚士リーダーの2人はどうやら逃亡したらしく、残っているのは被害者と化したベオウルフの3人と、豊穰の女神メンバーだけとなっていた。

「・・・さて、死人も出なかったようだし、任務完了か？」

「そうね。私もおおなかすいたし」

リーアとワルサーが2人で話を交わす。

これで、任務は達成らしい。

「それにしても、2人とも来てくれてありがとうな」

「アーシェちゃん、ユーヤ、ありがとう！」

振り返った2人は笑顔だったが、俺はなんか不完全燃焼感を拭えなかった。

なので適当に返しておく。

「ああ、いいって。な、アーシェ？」

「・・・まあ、私何もしてないしね」

ふわあ、と欠伸をするアーシェに、3人で苦笑する。

豊穰の女神メンバーやベオウルフは差し置いて、俺たちは入り口へと帰還することにした。

だいたい集合時間の15分くらい前のことであつた。

「いろいろ疲れたあゝ！」

ジュー、と俺が肉を焼いている間、アーシェはテーブルの上にぐでぐと伸びていた。

髪留めを解いたらしく、長めの金髪が伸びた方向に出ていて顔が見えない。

「はいはい、今日は肉焼いたから疲れ癒せ」

「おおー!!」

・・・相変わらず食事になると威勢がいい。

ってか、最近は俺の部屋がアーシェの生活空間になってきている気がする。

さっきも調理中に「お風呂借りるね」とかなんとか言って、数分後にはシャワーの音が聞こえていた。

・・・ちなみに今日は疲れたから料理教室は無らしい。全く、俺の疲れはどこに向ければいいんだ。

ステーキ風の肉を前に、アーシェは「早く食べよ」と駄々をこねている。

俺は昨日冷やしておいた麦茶をアイスルーム（冷やせるから使いナヨ、とこの前アーシェが魔法で作ってくれた）から取り出してグラスに注ぎ、持っていく。

「いっただっきまゝす!!!!!!」

超ご機嫌で肉にかぶりつくアーシェ。まあなんだかんだ言って、楽しいんだよな、こういう時間。

「あ、そうそう」

ごくんと喉を鳴らしたアーシェが、俺にフォークを向ける。・・・
行儀悪いぞコラ。

「今日このあとリーアちゃんの家泊まり行くから、明日の朝食は食堂で食べていくね。たまには別々登校でもいいでしょ？」

「ああ、分かった。でも初めてじゃないか？俺のどこ以外で朝飯」

「まあ、ユーヤが寮入る前はそういう生活だったけど。じゃあ、明日はそういうことで！」

「はいよ」

ステーキを平らげたアーシェは、スキップでシンクに皿を片付けに行った。

012 校外学習 後編（後書き）

リーアの職業^{クラス}詳細

罫を張ったりナイフ系統の武器を得意とする、盗賊系統と良く似た職業^{クラス}。

決定的な違いは、こちらは補助魔法を扱え、向こうは攻撃魔法が扱えるということだろう。

アシスタ

←

レンジャー↑今ココ！

←

ウォーレンジ

←

ローグ

←

???

013 熱血野郎クウガ

どうする・・・？

朝食は抜いたほうがいいか？

いや栄養面でというより、学校で俺の腹が保たない。

朝風呂は？

まてまてそれを抜いたら一日中妙な気分になってしまう。

落ち着け、いつものように振舞おうじゃないか。

いや無理だ！ そんなことしてたら・・・そんなことしてたら・・・
！

さて、とにかく俺が慌てている理由を説明しておこう。

うん、朝起きたら目覚まし時計が動いていなかった。

・・・それだけのこと。

リビングの時計を見たら、8..25（マジで遅刻する5分前）だった、それだけのこと。

というわけで、俺は今心底慌てていた。

1分で体を流し、1分で食事の準備をし、1分で朝食を平らげ、1分でその他身支度を終えた。

だがまあ・・・

「1分で到着できるか・・・？」

まあ、とにかく早く行こうと、少し諦めムードで俺は玄関の扉を開けた。

ガチャ。

ガチャ。

「あん？」

「お？」

俺が扉を開けたと同時に、左隣の部屋・・・四角い箱（最近、エレベーターと呼ぶのだとワルサーから教えてもらった）から遠いほうの部屋の扉も開き、中から酷く慌てた様子の半竜人^{リザードマン}の少年が飛び出してきた。

「・・・ってこんなことしてる場合じゃねえ！ 遅刻だぁ！！！！」

褐色の肌をしたその少年はそう叫ぶと、一目散に四角い箱のほうへ向かい・・・俺の様子を見て引き返してきた。

「おい！ 遅刻だぞ！ 急げ！」

髪の色もそうだが、暑っ苦しいヤツだなおい。

「いやもう間にあわねえし」

「おいしい！ もっと熱くなれよ！ 頑張れば間に合うんだよ！！
行くぞコルア！！」

なんだコイツ、と思ったのもつかの間、物凄い力で腕を握られ、
んでもないスピードで廊下をひきづられていく。

「ちょ！ おいテメ！ いてえ！ いてえから離せ！！」

「うるせえ！ 遅刻だぞ！ 急ぐしかないだろうが！！」

「俺を巻き込むじゃねええええええ！！！！」

「ぜえ、ぜえ・・・」

四角い箱の中へ、半ばつつーかほぼ強引に連れ込まれた俺は、その
とんでもないスピードに引き摺られたせいで息も絶え絶えだ。

「おお、俺のスピードについて来られてんのか。いいじゃねえか、
おい」

「何感心してんだテメエ・・・ありえねえだろそのバカみてえな力
とスピードは・・・どんなSTR（腕力）とAGI（敏捷性）して
やがる」

「ハッハッハ、まあな。そういえばお前、見たことあるな・・・待

て待て、あゝ。昨日の校外学習の時にちらりと見たのか。お前も実技免除組なんだろう？　なかなかの手練と見受けるぜ」

「そりゃどーも・・・」

チーン、という鐘音とともに、扉が開く。

「おっといけねえ遅刻だったんだ！　ほら行くぞ相棒よ！！」

「誰が相棒だ！・・・って掴むなオイいてえよってかそんなスピードで走るなああああああああ！！」

周りの景色がありえない速度で後ろに流れていく。いうなればそう、走馬灯・・・いや見たこと無いけど。

つつーか、は？　ヒトってこんな速く走れんのかよ？　よっしゃー俺は風になるぜ！！・・・既にグロッキーですはい本当にありがとうございました。

あの実技教師・・・名前なんだっけ、ああアドラー先生だ。その人の声がする。

「コラア！　クウガ・ターナ！　お前はまた遅刻かあああああ！！」

「すいませー！！！！！！！！！！」

・・・また？　コイツ常習犯なの？

ありえない速度で引き摺られながら、そんな悠長なことを考える。いや、それでもしないとさ・・・気持ち悪くて心が折れるんだよ・・・

・風が、頬に当たって痛いです・・・。

そのままクウガ？　だったか。ソイツはエントランスに突っ込む。

階段を残像のこす速度で駆け上がり、6階に到着するとやっと、うんやっとなんて解放されました。

ってかコイツ1年生だったのか、6階ってことは。

「ふう・・・やっぱり間に合わなかったか。いや、諦めなかったところそ大切だ。そう、大切なんだ」

1人頷く目の前の少年。ってかコイツデカいなあ・・・俺より頭一つ高いじゃん。

と思っていたら、急に握りこぶしを掲げてヤツは叫び出した。

「諦めんなよ！　もっと熱くなれよ！！　そう、俺はその言葉を忘れちゃいけないんだ！！　いけないんだああああ！！」

授業中だろう？　今。

そして今、遅まきながら確認した事が一つある。

コイツ・・・バカだ。

「はぁあゝ・・・」

遅刻して入った俺にとって最初の休み時間。

ため息を吐いて机の上で伸びていると、ワルサーがニヤニヤしながら俺の前の席に座ってこちらを向いた。

「お前、遅刻するなんて珍しいな。さっき仕入れた情報によれば、3組のクウガ・ターナに引き摺られたとか」

良くご存知で。

「もう今日は疲れた・・・」

「まあ次の授業は寝てても平気だろ。せいぜい疲れ癒しなよ」

「ああ、悪い。そうするわ・・・」

礼を言ってそのまま机に突っ伏してスリープモードに入る。が。

「ちなみにクウガ・ターナに関する情報だが・・・」

「勘弁してください」

今くらいは、あの熱血太郎のことを忘れていたかったのだ。

が、悪魔め。

俺の前で、延々クウガ・ターナに関する情報を語り続けたワルサーだった。

「結構噂になっている、STR1100の新入生。ソレアイツのこ
となんだよ。んで、かなりの熱血漢で筆記は目も当てられないほど
のバカ。半竜人^{リザードマン}の職業はワイルドビースト^{クラス}で、接近戦では多分学年
で一番強いだろう。だがまあ・・・バカだから買張れば勝てるかも
な」

あゝ・・・なんてイメージどおりのキャラ構成。

にしても、STR1100ってのはアイツのことだったのか。

「お、授業始まるな。飯はいつも通り学食でいいか？」

「ああ、そうだな。アーシェとリーアが今日は多分一緒に居るから

俺らだけでいいか」

「了解」

この日の2時間目は世界地理だった。

確かに眠れる授業ではある。幼少期を図書館で過ごした俺にとって、今更この世の地理なんかを勉強する理由が無かった。

っていうかほとんど頭に入っている。

「おやすみ・・・」

「おゝ、昼休みに起こすわ」

ワルサーに小声で挨拶して、俺は夢の中へと落っこちていった。

すうすう・・・

「おおゝい、起きろゝ、昼休みだぞゝ」

背中をツンツンシャーペンで突付かれる。いてえなオイ。

「・・・んあ？　もうか」

目をこすりつつ上体を起こすと、ワルサーも立ち上がって俺の前に来た。

「さ、飯食いにいこうぜ」

俺も立ち上がり、2人して教室を出る。

「妙に廊下が騒がしいな・・・」

「先生に怒られてるとかか？」

ワルサーが呟いた。俺は考えられることを言ってみたのだが、彼は首をかしげたまま、階段に向かって歩き出した。

「・・・あん？ 人だかりができてんな」

ワルサーに習って俺も立ち止まる。

なるほど階段よりも奥・・・1組やら6組やらがあるほうで、なにやら揉め事が起きているみたいだ。

そういう特ダネが大好きなワルサーに連れられ行くと、どうやらあの熱血野郎が絡んでいるようだった。

人だかりの中央には、熱血野郎とソレに胸倉を掴まれた昨日の“ベオウルフ”リーダーが居たのだ。

「さあて、状況把握だ。これはかなりの情報になるぜ！」

俺を置いて取り巻く人々に次々と説明を求めるワルサー・・・そうこう言う間にも、熱血野郎とリーダーのケンカは進行しているようだ。

・・・先生は誰も出てこんのかい。

「卑劣なマネして俺に勝って嬉しいのか！？　もっと熱くなれよ！
正々堂々戦えよ！！」

「う、うるせえ！　僕は主席が取りたいんだ！」

・・・なるほど。また“ベオウルフ”はこすいマネして、今度はク
ウガ・・・だっけか？　アイツを潰そうとしたわけか。確かに強い
よな、STR1100は。

だが、取り巻きの様子があまりクウガ側ってわけでもないのはなん
でだ？

見たところリーダーさんが完全に悪いはずなのだが、クウガを支援
しようだとか、リーダーを責める動きがまったく見られない・・・。

「なんでだ・・・？」

「それは、相手の彼がかなり高位の貴族だからだよ」

「心境読んでんじゃねえよ」

いつの間にか俺の隣に戻ってきたワルサーがそう告げる。

「まあ、それだけが理由ってわけでもなさそうだけどね・・・」

「あ？　それはどういうことだ？」

「周りの声を良く聞いてごらん」

言われるがまま、中央の争いを無視して周りの声に耳を澄ませる。

（まあたターナがなんかやってるよ・・・）

（うぜえんだよな、あの熱血・・・）

（もうさ、馬鹿力のせいでみんな迷惑してるのに・・・）

（クラス内でも浮いてるのに、この騒動で学年から嫌われるわね・・・）

（本人は気付いてないのかな？ 鬱陶しいことこの上ないよ・・・）

「分かったかい？」

俺は、かなりの憤りを覚えていた。

確かにうるさいやつだけど。

確かに暑苦しいやつだけど。

確かに・・・面倒くさいやつだけど。

それでも、今朝だって俺も遅刻しないようになってわざわざ引っ張ってきてくれた。

諦めんなって、なかなか出来ないことを実践してた。

遅刻はまずいけど、悪いことは悪いって自覚してた。

すごく・・・いい奴じゃないのか？

それがこんな不当な扱いを受けて、あまつさえクラスから浮いてるだど？

学年からも浮くだど？

・・・おいおいふざけんなよ？

「・・・ユーヤ？」

ワルサーが不思議そうな表情でみてくるが、今はそれさえも腹が立つ。

「お前は、コレを聞いて平気だったのか？」

上手く声が出ないが、ワルサーに問いかける。

すると彼は、乾いた笑い声を上げながら、言った。

「決まってるだろう？　今俺はクウガ・ターナに向かってふざけた小言を抜かしてる連中の弱みを握るべく名前をメモッてるところだ」

・・・ふふ、思考回路は同じか。

いつの間にか2人は先生に取り押さえられ、職員棟へと連行されていった。

俺はその後ろ姿を見ながら、1人呟く。

「今日・・・アイツ晩飯に誘ってやろうかな」

「いいこと言うな。いずれ俺も誘ってくれよ」

ワルサーもにこやかに笑ってそう言った。

「俺は熱き漢を目指す!!」

「いまどき流行らないわよ? ソレ」

「何を言う！ 俺はこれから史上最高に熱い冒険者として、歴史に
名を・・・」

「だから・・・もう考え方が分からないわ。でも、モテないわよ」

「な！？ な、な、そ、そんなはずは・・・」

「あるから」

「ぐぬう！」

夕暮れ時。俺はあの騒動の時に言ったとおり、クウガを隣の部屋から呼びつけて晩飯に招いていた。

俺はキッチンで調理の真っ最中だが、懸念していたアーシェとの相性は悪くなく、会ってから数時間経った今ではもうすっかり意気投合している。

・・・意気投合、ではないな。まあとにかく仲は良くなっていた。

「ほら、そろそろ出来るから食器とか準備してくれ！」

クウガの好みを彼の見た目で選んだ結果、今日はガッツリと肉の丼だ。

ジュー・・・と脂のたぎる音をさせるソレを見て、案の定クウガは涎を腕で拭いている。

正直そのしぐさを半竜人^{リザードマン}の彼がやると、いろんな意味で怖かったりしたのはご愛嬌。

アーシェが棚から出したどんぶりに炊いた米をよそい、汁ごと肉かけ、それをクウガが運ぶ。

その間に和えておいた温野菜のサラダを盛り付け、アーシェはアイスルームから麦茶を取り出す。

「また作っておくか」

麦茶の量がだいぶ減ってきたのをみて、俺はそう呟く。

「美味そうだなオイ。たまには食堂以外ってのもいいな」

「ユーヤの料理は食堂以上よ？」

俺が3人分の麦茶を注いでいると、なぜかアーシェが誇らしげにいう。

「なんでお前が威張るんだ」

苦笑しつつ、俺はクウガの右隣に座った。

正面にアーシェ、左にはクウガ。うん、やっぱり人数が多いと食事
も美味いよな！

「さ、食おうか」

『いっただっきまーす!!』

箸でかきこむようにして食うのはクウガ。

「行儀悪いな、
テメエ」

俺がクウガにそう言った直後。

「うめええええええ!!」

と大絶叫。

「ふむ。いいぞ、かきこんでくれて全然構わない」

「ユーヤ、気持ちには分らないけど」

呆れたように苦笑するアーシエ。

一息ついたところで、クウガが俺に言う。

「わざわざ飯に招待してもらえるなんてな。ありがとう。礼を言うぜ」

「まあな。今日連れてってくれた礼だとも思ってくれ」

「ハハ、そうか！ いやあ、熱く生きるのはやはり男の生きる道だな！」

「暑っ 苦しいわボケが！」

「何おう!？」

俺とクウガの漫才に、アーシエは終始コロコロと笑っていた。それ

にしても。

「今日はあの後どうなったんだ？」

俺が問いかけると、クウガは少し、苦い表情になる。

「ああ、胸糞悪いぜ？ 先生は終始貴族であるアイツの味方だし、何よりほら、俺こんなキャラのせいで友達いないから・・・」

友達がいらない、か・・・。

・・・。

「バツカじゃないの？」

俺とクウガが何もいえないでいると、別の場所から声がした。

「アーシェ？」

「友達がいらない？ アンタさ、もうここに2人も居るじゃない」

その言葉に、隣にいたクウガは一瞬驚く・・・が、すぐに元の表情に戻る。いや、ちよつと目端に涙が浮かんだな。やっぱり俺らと同級生、こんななりでも12歳だもんな・・・。

「お、お前ら・・・」

・・・そうだな。アーシェの言うとおりだ。俺はなんとも言えない気持ちになり、微笑みをクウガに向ける。

「ああ。ここに居るぜ」

「・・・くく・・・そ、か・・・ありがとう・・・」

STRが1100あるとはいえ、俺たちはまだ12歳。友達が居ないってのは、俺の想像以上に辛いものかな・・・もつとも俺もアーシェも、この年まで友達など居なかったのだが。

それでも学校という縛られた枠組みのなかでソレが居ないというのは、確かに俺もキツイかも。

クウガはアーシェの言った温かい言葉に触れて、少し感無量のようだった。

しばらく、そんな温かい空気が続いた。

ガチャガチャ・・・

キッチンで俺が食器を洗っている間、アーシェとクウガはさらに親交を深めているようだ。

生徒証の見せ合いをしている。

「うわ！ クウガのことだったんだ、STR1100って！」

「そういうアーシェも、かなりハイスペックじゃねえか！ 熱い戦士になれそうだぜ！」

「・・・いや、それは遠慮するかも」

「なにい！？　なぜだ！！」

・・・ずいぶんとまた、暑苦しさMAXだなアイツ。

「・・・と、よし」

洗い物を終え、俺は食器棚に水分を拭き取った皿やらなんやらを片付ける。

そうしてエプロンを取り外した俺の前に、ドタドタと2人が走ってきた。

「どうした？」

「いままでの話聞いてた？」

そういえば食器を片してる間も2人は話し込んでたな。

「悪いけど、洗い物集中してた」

俺が首を振ると、アーシェとクウガは目配せをしたのち、2人同時に頭を下げた。

『PTになってください！』

・・・クウガはともかく、なんでアーシェまで？

「2人はもう互いに了承したの？」

「うん、私としても彼の強さは申し分ないし、クウガって職業がワイルドビーストらしくてさ、私は後衛だし、ユーヤはオールラウンダーだけど前衛ではないでしょ？」

「ワイルドビースト!？」

ワイルドビースト・・・武闘家系の職業は特殊な職業で、第一段階の武闘家から、2種類の派生がある。技術を駆使して洗練された動きを要求する“モンク系”、突出した力を用いて一撃一撃に重いダメージを載せ、さらに獣のような速度で襲いかかる“ビースト系”。10人の武闘家が居たら9人はモンクに転職するが、その理由は力・・・STRがビースト系の職業の規定値に及ばないから。はっきり言えば、モンク系よりビースト系のほうが断然実力は上である。そしてクウガの“ワイルドビースト”。これはもう、この年でなれるのは奇跡としか言いようがない。突出したSTR（腕力）とAGI（敏捷性）がなければ、ビースト系でさらに3段階目のこの職業になどなれるはずがないのだ。

あれ？ 昼間もだれかに聞いた気が・・・まあいいか。

つまり・・・

コイツマジパネエ。

「まあ俺はアーシェがいいなら全然構わないさ」

「本当か!？」

目を輝かせて言うクウガ。ちょっと怖いっす。牙見えてます先輩。

「ああ。これからよろしくな」

「おう！！ 親父に言わなきゃな。俺にもとうとうPTが出来たって！」

そう言ったクウガの表情は、とても嬉しそうだった。

013 熱血野郎クウガ（後書き）

クウガの職業クラス詳細

凄まじい速度と力を持った拳打や蹴術で戦うかなり頼もしい前衛職業クラス
ナックル系統の武器のみ装備できるが、物理攻撃力は全系統中でも
一二をを争う。

武闘家

←

ビースト

←

ワイルドビースト↑今ココ！

←

キラービースト

←

???

014 開幕戦 前編

バゼラート暦1206年05月15日・・・

「バトルボール？」

クウガがPTに加わってから数日後、休み時間にアーシェが廊下で俺を呼び止めた。

「そ。明日北西にあるコロセウムで、3年対4年の試合があるんだってさ！ 今年の学年の中ではナンバー1、2を争うのがこの2学年らしくって。5、6年よりも実力上だって言うし、ほら私達もこんどのテストで選手枠勝ち取って出場する気満々でしょ？ だってら一回見ておくのも悪くないかなって思うんだけど・・・。どうかな？」

ふむ、悪くない。ってか面白そうだ。俺としてもワルサーから初めてバトルボールの存在を聞いたときは是非やってみたいと思っていたし、そのために観戦しに行くってのもいいよな。

「それで、俺だけ？ クウガは誘うか？」

「ああそれなんだけど」

人差し指を頬にあて、アーシェは一旦言葉を止めてからもう一度つむぎ出した。

「クウガ、この前のいざこざがあったせいで処分が下されてるらし

いのよ。確か・・・普通教室棟、寮以外の侵入禁止？ 先生の監視下にずっと置かれるらしいわ。一週間」

あちゃゝ・・・貴族権力うぜゝ・・・。

「それで、リアもPTの先輩が出場するらしくてそれ以外のみんなで行くらしいから・・・だからさ・・・ええっと・・・その・・・」

段々と顔を赤らめるアーシェ。モジモジと人差し指を絡ませて、視線を泳がせる。何かあったのか？

「ふ、ふふ2人でい、行かない？」

「おっけゝ。何時から？」

「あれ？ あっさり・・・あ、えっと確か授業終わってから17・・・00スタートじゃないかしら？ だから学校終わったら、ここの棟のエントランスホールで待ち合わせしよ」

キンコンカンコン

鐘が鳴る。2時間目開始の合図だ。

「んじゃ、俺は次“現代軍学”だからまた後でな」

「ん。それじゃあねゝ」

アーシェはとても楽しそうにハミングしながらスキップで教室に戻っていった。何がそんなに嬉しいんだか。

現代軍学は普通教室棟・・・つまり自分らの教室で行うため、移動しなくて済む。

俺はうとうと窓辺でくゆらぎながら、バトルボールについて考えを馳せていた。

ワルサー曰く、ポジションはガード、フォワード、センター・・・それぞれG、F、Cで表すんだったな。

合計8人制の競技らしいが・・・むう、やるとしたら俺はどこになるだろう。

親父はF、フォワードそれもかなりのストライカーだったらしいが・・・俺は自分が行く！ というタイプじゃない。

Cはどうか？ センターいや、守りに徹するというのは俺のキャラじゃないし、何より職業柄俺向きじゃない。クラス

やはり・・・Gか。ガード

全ての選手を纏める司令塔。沈着かつ冷静に状況を判断し、絶妙なアシストを味方に施す。

PT内でもそう在りたいな。

だが、Gは確か各チーム1人だった気がする。だとすれば、倍率は高い、か。

ふう。でも絶対出場してやるさ。実技テスト20位以内なら入れる・
・それなら本気でやるほかない。

「・・・ユーヤ」

背中をシャーペンでつつかれる。・・・いい加減これにはもう慣れてしまった。俺は窓の外を眺めたまま、いつものように小声で会話を開始する。

「なんだよ」

「明日のバトルボール、見に行くのか？」

「ああ。お前もPTの連中と行くらしいな」

「お、そうだよ。なんで知って・・・ああ、アーシェちゃんか」

「それで？」

「んあ？ ああそうそう。お前だったらポジションどこやりたいかなあって。親父さんと同じ道に行くのか？」

「いいや？ 俺はGガードをやろうと思ってる」

「Gガード？ それはまた。でも、良かった」

「良かった？ なんださ」

「俺Fフォワード志望なんだよ。お前は争いたくない相手ランキングの上位ラ

ンカーだからさ。被って欲しくなかったっーわけ」

「点取り屋か・・・アーシェもFやりたそうだな。それからクウガも。いやひよっとするとリーフィアとか言う彼女も・・・」

「おいおいそんなに居たら俺勝ち目ないじゃん！」

「はは、お前ならやれるって。そういや、リーアは？」

「ああ、リーアは多分、C志望だ。センター罫とか張るのって、ディフェンダー向きだろう？」

「確かに。でもこう考えると不思議だよな。俺らの周りには、実技試験20位以内に入りそうな知り合いがわんさか居る」

「まあ、類は友を呼ぶってな。おそらくバトルボール参加者は毎年実技訓練免除組だ。30余名のなかで、トップ20に向けて凌ぎを削るわけだ」

「ふーん。俺が知らないやつで、上位に食い込みそうなヤツは？」

「ふむ・・・まあはっきり言ってお前やアーシェちゃん、クウガ、リーフィア、リーア、自分で言うのもなんだが俺、それからあと戦士系のデュラン・ガーデス、僧侶系クレリックのウォーロング・ハザード、召喚士系のアシルス・クレス・ニールス・・・あの“ベオウルフ”のリーダーな？　そこから幻術師系で言えばビスタ・エリヌス・・・このくらいがダントツで第1学年のトップだ。他の連中は30人居る中でも、2軍クラスってところだな。だいたい今挙げた連中がバトルボール参加者候補ってところか」

「まあ、ワルサーが言うんだから間違いはないだろ。だとすると、^{ガイド}Gでライバルになりそうなのは、その僧侶^{クレリック}のなんちゃらと幻術師のなんちゃらだな。そいつ等が別のところを目指すなら話は別だが」

「妥当だろ。おそらく、Gはお前が取る。能力的な問題じゃない。精神的にだ。俺が見てきた中で、お前は突出して瞬時の状況判断能力が優れている。それが数多の“フィールド”を駆け抜けてきた経験によるものなのかは分からないが」

「はあ、買い被りすぎだ。まあとにかく、明日いろいろ参考にしようか」

「おっけー。話すこと話したし、俺もう寝るわ」

「うおい」

ツツコミを入れたものの、ワルサーの寝息が聞こえてきたのはその数秒後のことだった。

バゼラート暦1206年05月16日・・・

今日は朝から生徒たちの熱気が違った。

ワルサーに聞けば、今日は今年の“開幕戦”らしい。去年の上位2チームが争う事実上の決勝戦のようで、この開幕戦と12月に行われる学園内トーナメントは、生徒が自由に観戦できる。

そしてその学園内トーナメントを制した学年は、3月の“バゼラート祭”の青少年バトルボールトーナメントにて全国に点在する様々な学園の猛者との試合が組まれるのだ。

さて、話を戻そう。まずはこの開幕戦だ。

前年度のナンバー1は今年卒業した旧6年生だったらしく、今年の開幕戦は前年度2位であった現4年生と、前年度3位であった現3年生で行われる。

ちなみに親父の代は、毎年開幕戦に出ていたらしい。

どれだけ強かったんだおのれらは。

さらにちなみにだが。その親父達の代には“バゼラート祭”でのバトルボールトーナメントなど存在しなかったそうだ。

「にしても、みんなテンション高いといふかなんというか・・・」

放課後になり、エントランスホールで待ち合わせをしているため階段をのんびりと降りている。

たまに見受ける人ごみの中心には、必ず水色か黄色のTシャツを着ている人間がいた。

バトルボールの参加者が、周りから激励を受けているのだろう。

ちなみにそのTシャツの色、学年カラー、らしい。現4年が水色、現3年が黄色。ちなみに俺たちの代は多分、現6年生と同じ藍色。

バゼラート五大元素をモチーフにしてあるらしく、火属性の赤色、水属性の水色、土属性の黄色、風属性の緑色、そして龍属性の藍色。

魔法の属性でもあるこの五つを、バトルボールの学年カラーにしているようだ。

もちろんバトルボールに1年生は参加できないため、学年カラーなどはない。

さて、そんなことをしているうちにエントランスホールに到着する。

アーシェは意外と簡単に見つかったが、こちらには気付いていないみたいだ。

外に近い壁に寄りかかり、時間をちらちら見ている姿はこの上なくかわいい。

早く行ってあげよう。

「アーシェ！」

「！ 遅いよもお」

ぷくーっと頬を膨らませるアーシェ。

「悪かった、さ、席取りに行こうぜ」

「あ、待って。観戦中に食べられるもの、何か買って行こ」

食堂に行くのかと思いきや、観戦できる試合の日は北の町から露店が沢山出るらしい。

コロセウムに向かう道の中、特に飲食店が多く存在していた。

結局俺とアーシェは一緒に焼きそばを買い、店主のおばちゃんに冷やかされてアーシェはまだ赤面状態だ。何を言われたかは推して知るべし。きっと俺も今顔が赤い。

コロセウムは、灰色の外壁に囲まれていた。

唯一の侵入経路であろうこの正面で大口を開けているような入り口は、入るとすぐに幅の広いのぼり階段になっている。

今も沢山の人々が会場内に入っていくが、それらが横一列に並んだ

としてもなんとか詰まらないくらいの幅である。

さて、そんな上り階段を上がりきると、わっと光が侵入者たちを包み込む。そこは観客席となっており、正面に設けられた手すりから体を取り出すと眼下には広大な芝のグラウンドが広がっていた。

天井はなく、夕焼け空に突き抜けるようだ。

どこかしこに設けられた灯は、火属性魔法で灯すのだろう。

「ふえーーーーでけーーーー！」

「私も初めて見るけど、おっきい・・・」

どうやらまだ両チームとも入場はしていないようだ。

プレー開始まで40分弱あるから、まだアップしていないのかもしれない。

俺とアーシェはそこからグラウンドとは逆方向に階段を上る。どこかの席に座ろうかと話していたが、少し高めに座りたいらしいアーシェの要望に応え、もう少し上のほうに上がる。

いい感じに2人分空いている席があったので、そこに座ることにした。

「かなり見やすい位置じゃないか」

俺からみて右端と左端にゴールがあり、俺が真っ直ぐグラウンドを見つめるとちょうどそこにセンターサークルがある、まさにベスト

ポジション。

ちなみにこのバトルボールのグラウンドだが、ゴールとセンターサークル以外には何もない。

障害物もなければ、線すらも引かれていない。

どうやらボールを持ってどこに行こうが自由なようだ。

買ってきたコーラをチューチューと吸うアーシェは、グラウンドの両端から選手が出てきたのをみて瞳の色を変えた。

「出てきたね・・・」

真剣そのものの表情でアーシェは言う。

その瞬間、わっと場内が沸く。

輝かんばかりの水色と黄色のユニフォームに身を包んだ戦士たちが、次々に入場してきたのだ。

開始30分前となった今、場内はほぼ満席。

俺たちの周りにも生徒はもちろん、北の街から来た人々や、選手の関係者など溢れるほどの人がいる。

「・・・あれがボールか」

グラウンドを半分に分け、各チームがアップを始める。

その選手の間を行き来する球状の茶色い物体が、バトルボールの公認球なのだろう。

「それにしても、ボール捌きがみんな上手いわね」

アーシエは、視線をグラウンドから離さないまま、そう感想を述べる。

確かに、パス回しは当然のこと、ゴールにボールを打つ（シュートというのだと、ワルサーから教えてもらった）動作も、全てが洗練されているように見える。

しばらくそうしてアップを続けた選手たちは、開始5分前になるとグラウンドの向こう端に設置されたベンチへと引き返していった。

そこで、20人中8人がTシャツを脱ぐ。

その下に着ていたのは、ノースリーブのランニングのようなものだった。

「あれがユニフォームかあ、かっこいいなあ」

と、となりでアーシエが言っているので、ユニフォームなのだろう。

背中には大きく数字が書かれている。

「ちなみに、だいたい実力順に1〜20までの番号が割り振られるわ。ポジションなんて関係ないの。だから必然、相手の選手も敵の1番を潰しにくるわね。でもま、例外もあるからレギュラーが順当に1〜8じゃないことも多いけど」

「ふうん」

一口コーラを飲む。さて、そろそろ試合開始だ。

014 開幕戦 前編（後書き）

ユニフォームは、ランニングの少し肩が広いものだと思ってください。

バスケのユニフォームと言って分かる方は、それで解釈をお願いします。

015 開幕戦 後編

茶色の球体がグラウンド上を飛び交う。

その間観客達の喚声はやむ事を知らない。

「す……げえ」

吐息のような言葉が漏れる。本当に凄まじいのだ。

選手全員が、人でも殺すのか？　ってぐらいの気迫でボールを奪い合う。

時折天使族や鳥人^{セレスティア}、魔族^{ダリア}といった翼を持つ種族が空を飛び、空中戦を行うこともあり壮絶だ。……俺も精錬術を使えば飛べないことはないが。

そして、水色のユニフォームを着た中でも、突出した存在が1人居た。

背番号1を背負った彼は、見る限りF^{フォワード}の選手だ。

プレイスタイルを見る限り、おそらく魔法剣士系の職業^{クラス}であることが予想される。

種族は多分エルフだろう彼はしなやかに金髪を流しながら、次々と襲い掛かる敵選手を魔法や剣戟、さらには格闘術を駆使して避わしていく。

黄色のユニフォームに身を包み、背番号は1。クレイ・トールズから唯一ボールを奪え、3年生側に流れを持つてくる。

3年生ボールで再びゲームが始まり、ボールをキープするのはその彼だ。

4年生側の槍使い系選手が、武器を構えてその彼に突進する。怖気づくことも一切なく、彼は飛翔して回避した。

そのまま敵陣へ空中から突っ込む。

負けじとばかりにクレイ・トールズが跳躍だけで彼を見据えると、火属性魔法ファイアークラッカーを放つ。が、彼はその魔法をさらに回避する。

クレイ・トールズの口元がつりあがった。「かかったな」とでも言いたげである。

次の瞬間、4年生チームの魔族が、翼を広げてGの彼をしとめにかかった。

・・・だが。

彼は突進してくる魔族サターンの少女を見つめて微笑み、ボールをさらなる高みへと放り投げた。

『!?!』

会場中の総意がソレであった。彼の奇怪な行動に対する、声にもならないような驚き。

だがその行動は、一瞬で意味を成す。

そのボールを放り投げた先の上空には、3年生側の鳥人ダリアの少女がタ
イミングよく飛び上がっていた。

そしてそのまま、上がってきたボールを敵側ゴールに思いっきり蹴
り飛ばす。

瞬間、蹴り放たれた球体はネットに突き刺さった。

『・・・わ、わあああああああああああ！！！！』

一瞬の夢から醒めたように、会場はまたも沸きあがる。

『エイミー・ネイデイスの華麗なるシュートでしたあ！！　だが会
場中が啞然となったのはやはり、この男のプレーでしょう！！！！
変幻自在の司令塔！　インクアイリ至高のGガード！　バジルうううう
ううう！！！！　デリアー！！！！！！！！！！』

『ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！
！！！！！！！！』

バジル・デリアール・・・やっぱり今日見に来てよかったぜ。

「あの人かっこいいよねえ」

隣でアーシェが言う。だが恍惚と言うのではなく、真剣に将来
の“敵”として鋭い眼光とともに見据えているのだから彼女らしい。

「ああ。俺の目標が出来たよ」

「ユーヤ、Gするつもりなの？^{ガード}」

「ああ。やっぱりカッコいいからな。アーシエは？」

「私はもちろんFよ！^{フォワード} クレイ・トールス先輩以上の存在になってやる！」

飲み干したコーラの紙コップを握りつぶしつつ、アーシエは希望の宿った瞳をクレイ・トールスにぶつけていた。

バゼラート暦1206年05月17日・・・

「いやあ、昨日の開幕戦は凄かったなあ！」

「確かに。1対1のまま終わっちゃったが、白熱した闘いが見られたんだ。満足だよ」

ワルサーと2人、自分の机の上に座って、昨日の試合についてのトークを繰り広げる。

今は既に昼休みのため、教室内にはそこまで人は居ない。

ワルサーはおおげさに手を広げ、自分のポジションである先輩を盛大に褒め称え始めた。

「なんてったって、クレイ・トールス先輩だろ！　ハンパないぜあのキープ力とシュート力は！」

「俺的にはやっぱ、バジル・デリアールさんだな。当面の目標が出たぜ」

そんなことを話していた矢先のことだった。

名前も未だ覚えていない同級生の男子が、俺たちの座席とは正反対の入り口らへんから忌々しげに俺を呼んだ。

ちなみに言うておくと、俺とワルサーはクラスの一部から結構嫌わ

れている・・・いや妬まれている。

実技免除組だからな、気持ちも分からないではないが。

というわけで、邪険に扱うような声のかけかたをするわけだコイツらは。

「おいミナモト、こっちに来い」

「は？ 用があるならテメエが来いよ」

「ツツ！ 先輩が呼んでんだよ！ 実技免除組だからっていい気になってんじゃ」

「構わない。失礼するよ」

『!?!』

一瞬で五月蠅いハエのことなどどうでもよくなってしまった。

ワルサーが、驚愕の表情を隠せないまま必死に声を絞り出す。

「な・・・なんでクレイ先輩が・・・？」

「お、名前を覚えてもらえているとは嬉しいな」

そう、男にしては襟足の長い金髪、輝かんばかりな碧の瞳、爽やかな笑顔、横に尖った耳・・・噂の冷め切らぬ話題の人、クレイ・トーレス先輩であった。

彼は俺たちの居る窓辺にまで、どこまでも堂々とした態度で歩み寄る。

いつの間にか教室の外には大量のギャラリーが出来ており、あまりに多すぎて教室内にまで少し溢れているサマだった。

「ユーヤ・ミナモト君はキミか。黒髪に黒い瞳。うん、間違いない」

1人にこやかに頷くクレイ先輩。いやいやいやいやマテやオイ。なんで俺に？

「俺がそうっすけど・・・なんでクレイ先輩がここに？」

「ハハハ、それはごもつとも。いや、キミの将来を見込んでね・・・いや、キミとリーフィアさんか。キミ達2人が2学年に上がったとき、きっとバトルボールでとんでもない力を発揮するだろうと思って、どんな面構えなのか拝みに来ただけさ」

俺とリーフィア・・・リーフィア・ローズベルトか。彼女と俺の共通点はなんだ？

・・・。

「ああ、親父関連ですか」

俺が納得いってクレイ先輩に問うと、親指を突き出して笑った。

「ご名答。楽しみだよ、キミ達と戦うのが」

「いえいえそんな。プレッシャーかけないで下さいよ」

「そうか。キミはバトルボール選手になろうとは思っているのかい？」

「もちろん。といっても親父とは違って、G志望ガードですが」

俺がそう言うと、自分の顎に手をやりクレイ先輩は「そうかそうかと頷いて言った。

「確かに、キミのスペックを見る限りはそのほうがいいかも知れないね」

「！？ 分かるんですか？」

「生徒証の細かい数値は分からないけれども、どれだけ修羅場をくぐってきたかとか、判断力に優れていることは分かる。やるヤツにはやるヤツの、臭いがあるからね」

臭い・・・？

「ハハハ、腕なんか嗅がなくていい。そうじゃなくてね、歴戦の戦士のオーラ、とでもいうのかな」

「はあ」

「まあいいや。時間をとらせて申し訳なかったね。じゃあ失礼するよ」

颯爽と踵を返し、クレイ先輩は去っていく。

詰まっていたギャラリィも、先輩を避けるように道を譲る。

「ありがとう」

嫌味ったらしくなく、それでいてぞんざいでもない簡潔な挨拶と微笑みに、女の子は恍惚と、男子連中は嫉妬に狂った瞳を映し出していた。

うーん、やっぱり違うなあ。

「ユーヤ!!」

「どういことだよ!!」

どたどたと、アーシエ、クウガが教室に闖入してくる。

そんなクウガをまじまじと見つめ・・・。

「うん? どうしたユーヤ」

「いや、やっぱりクレイ先輩は違うなあ、と」

「デメエ!! 俺と比べたろ今!!」

頭がヤツの腕に巻き込まれ、ヘッドロックを喰らう。

「ヘッドロックとか子供かよ・・・ってイデデデデデデデデ!!」

こんのSTRはマジバケモンだって。

万力にはさまれたような痛みに顔をしかめつつ、俺はみんなに向き直る。

「クレイ先輩と知り合いだったの!？」

「うんにゃ」

「なんでそんなアホの子みたいな表情なのよ・・・」

アーシェがため息をつくと同時に、今度はクウガの尋問が始まる。

「じゃあどういう絡みだったんだ？」

「将来を見込まれたのさ、ボクは」

「なんでそんなクソ貴族口調だよ・・・」

クウガもため息をつく。

さすがにノリも面倒になってきたので、あらかたの説明をざっとしてしまった。

「・・・ふうん、お前の親父ねえ」

「ってことは、宣戦布告みたいなものかしら？」

「まあ、そうなるな」

俺が頷くと、今まで黙っていたワルサーが口を挟んできた。

「これはもう、是が非でもバトルボールに参加して全校一位を取らないとな」

「そうだぜ！ 男は熱く生きるものだ！！ 頂点を目指して我武者^{がむし}羅^{やら}に生きる！！！！ これぞ男道！！！！」

「別に男道求めてねえよ」

軽くツツコミを入れて、俺は周りを見る。

「とにかくライバル視してくれたんだ。俺らでバトルボール勝ち取ろうか」

ワルサーが笑顔で頷いた。

015 開幕戦 後編（後書き）

クレイの職業クラス詳細

魔法と剣術を同時に扱える、オールラウンダー的存在。
どんなPTと組んでも戦闘で活躍できる、いわばエリート職業クラスである。

魔法戦士

←

魔法剣士

←

ブレードマジシャン

←

スペルダンサー↑今ココ！

←

???

016 勉強会

バゼラート暦1206年07月11日・・・

朝、俺とクウガ、アーシェの3人はいつものように俺の部屋で朝飯の最中だった。

1人は食事もそこそこに、俺らが食っている間ずっと筆記試験の勉強をしていたが。

今朝は朝食に俺の集落の郷土料理、“冷麦”を出し、2人の大絶賛を経てとても満足しつつ氷にうずもれた麺を取り出し、つゆに漬けて啜っていた。

「アーシェはよくもまあそんなに勉強して頭痛くならないなあ」

「熱くなるのは構わないが、勉強にだけは俺も熱くなれん」

「・・・」

俺らの声も聞こえないようで、一心不乱に問題を解き続けるアーシェ。

「おいアーシェ？」

クウガが心配そうにアーシェの顔を覗き込む。

幸い今日は年に数回ある学園の休日だそうで、長期休暇とは違った

単発の休みである。

だがおそらく学園側が考えるこの休日の意図は……

「明日っからテストなのよ!?　なんであんたらこそそんな平然としてられるのよ!!!」

勉強しろ、ということなのだろう。

「まあ俺は学園を楽しむために入学したからな、勉強はいいや」

ちゆるるっと冷麦を啜りながら、俺は言う。

「俺はそんなに優遇されているわけではないが……勉強はやる気が起きん」

クウガもそうらしい。と、いうより、バカだからな、コイツも基本。

会う前から、STR1100のヤツなんてバカだろうとは思っていたが、案の定だ。

ワルサーの情報では、“冒険基礎”の小テストで、2／50という悲惨な結果だったらしい。

……まあ、テストの点数ですら情報で入ってくるワルサーが恐ろしくなったりはするのだが。

それはさておき

閑話休題、とにかくテストは全部実技で補うしかないだろう。幸い実技はかなり恵まれているからな。

俺はというと、まあ一応実技免除組ではあるが、当日は本気を出す気満々だ。その結果如何でバトルボールの選手になれるか決まるんだぜ？

実技試験はそれでいいとして、筆記は正直、どうにでもなると思っている。数多のフィールドをみてきたこともあり、授業で聞いた内容など、知っているものが8割だった。

クウガが悲惨な成績をたたき出したその小テストだって、42／50だったしな。上等だろ。

・・・まあ、後ろにいたワルサーが50／50なんつー結果だったのは悔しかったが。

アイツの場合、テスト問題調べ上げてるって可能性もあるしな・・・。

「まあいいや。じゃあ今日はうちでずっと勉強すつか」

席を立ち、食器を片すためキッチンへ向かう。

後ろからクウガのため息と、アーシェのガッツポーズとともに出るような声が聞こえてきたが、まあいいだろ。

カチャカチャと皿を洗っている間、アーシェがクウガに勉強を教えていた。

なんだかんだでコイツらと一緒にいて3ヶ月・・・お互いの性格もあらかた掴んだし、仲間と過ごす楽しさも知った。

学園来て良かったな、などと、晴天に舞う風鈴を眺めて呟いてみる。
チリリン、と心地の良い返答が返ってきたことに苦笑しつつ、タオルで手についた水滴を拭う。

「筆記試験には興味ねえけど、順位が出るらしいからな。頑張ろうか」

伸びをして、アーシェの向かいに座る。

「あ、わりい。俺も教材持ってくる」

隣の部屋へと戻っていったアイツが一番ピンチじゃなかろうか。

「にしても、少し暑いな」

俺は手ごろな無記入の紙を手に取り、

「リファイン
“精製”」

白い球体にする。

「なにすんの？」

アーシェが不思議そうに爆走していたペンを止めた。

「クラフティング
“練成”」

そのまま押しつぶす。

「精錬・扇子」

「・・・ユーヤ、そんなこともできるのね」

アーシェがため息を吐いていたが、気にせずパタパタと煽る。

「まあいいわ・・・」

パタパタパタパタパタパタパタパタパタパタパタパタパタパタ
パタパタパタパタパタパタパタパタパタパタパタパタパタ
パタパタパタパタパタパタパタパタパタパタパタパタ

「いつまで扇いでんのよ!!」

「ええ？　だってコイツ扇ぎ続けないと消えるし」

「ああ、そーゆー・・・」

精錬術にはいくつか種類がある。

戦闘中一瞬の効力を発揮する、精錬魔法。この前の幻術師戦で使った落宝金銭粉レジスタダストなどがそれにあたる。

次に、一度の戦闘中にのみ姿を顕現し役立つもの。精錬武器と精錬具。デスベアーを倒した時のフレイムブレードや、さきの森と丘で使用したレミーラの魔レンズがそれだ。

他にも数種、トンでも技を秘めているのだが、今は説明することもないだろう。

話を戻すと、どれも効果を発揮し終えれば霧散する。

この扇子などは扇ぐことが“戦闘”であり、それを終えれば消えてしまうのだ。

「・・・ま、もういいか」

扇ぐのをやめると、数瞬ののちに霧散した。

「でさ、ちょっとここ分らないんだけど・・・」

その尖った耳にかかる髪をかきあげながら、俺にノートを差し出してくる。

彼女の指差す先には回復薬がHPを回復する数値に関しての問題が載っていた。

「ああこれは・・・」

「あ、そっかあ。・・・フフッ」

俺が教えているときのアーシェは、なぜかとても嬉しそうだった。

「やっぱりバカ？ バカなのか！？」

昼飯の後片付けをする俺の耳には、アーシェの暴言とクウガの焦った声が聞こえてくる。

「だ、だってよ、コレ計算とかできないじゃんか」

「だ〜から！ 魔法を使役した時間に比例してMPは減っていく

の！ 最終使用MP÷秒数Ⅱ一秒あたりのMP使用数でしょうが！
」

「ええ？ わかんねえよ・・・」

「だからあ！！！」

昼飯を終えて数分してから、ずっとこんな調子である。

正直俺としてはワイルドビーストのクウガに特にMP換算を覚える必要性を覚えないのだが・・・テストに出るからしょうがないか。

さて、俺は俺で個別に勉強をしようかな・・・と思ったその時だった。

ピンポーン

誰か来たのだろうか。いつもウチに来るメンバーは揃っているので、見当がつけ辛い。

ともかく出なければならぬのは確かなので、問答を繰り返している2人を尻目に玄関へと向かう。

「ほいほい」

ガチャ、と扉を開くと、緑色の短髪に鋭い眼つき。見慣れた情報屋が立っていた。

「や！ ふむ、やはりキミの部屋はここであっていたかそれにして
もまさかアーシェちゃんのお向かいでかつクウガの隣とはなかなか

どうして偶然とは繋がるものだねいやしかし俺としてはこの区画に同席したかったという思いもすてられないが俺の5階にも立地には満足しているしおっと話が逸れたそうそうテストに関して面白い情報が入ったからね教えに来たよ上がっていいかい？」

必殺・マシンガントーク。

ここまで息の続く人は初めてみたってそんなことはどうでもいい。前半はただの寮部屋に対しての愚痴だったしな。

「テストに関する面白い情報？　まあ上がれよ」

どうして俺の部屋を知ったかは知らんが、コイツのことだから驚きやしない。

「おうそうか、お邪魔しまゝす」

スタスタとリビングのほうへ向かうワルサーを眺めつつ、後ろ手で扉を閉める。

「あらら、PT全員集合だったの？」

「よう」

「こんにちはワルサー」

「そういえば俺の部屋に来たのは初めてだったか」

俺はリビングを通り抜ける。ちょうど良いので4人分アイスティーでも淹れようか。

「じゃあ失礼するよ」

そういつてアーシェの隣に腰掛ける。クウガの対面だ。

「んで、その情報って？」

「フッフッフ、悪いがこの情報は有料だ」

怪しげな声色で言うが、

「あそ？　じゃあ要らねえ」

「ちょ！？　いや欲しいだろ？　テストに関する情報だぞ！？」

「有料とか」

語尾にカッコ笑をつけるくらいの勢いで言ってやる。

「頼むって！　俺はその対価が欲しくて来たんだ！」

「・・・なんだ？　金じゃないのか」

「ああ。頼む！　俺に勉強を教えてくれ！！」

「・・・お前勉強できたよな？」

「ああ、アレは“冒険基礎”の話だろ？　“数値換算”はさっぱりなんだ！」

数値換算、さつきクウガが頭抱えてたヤツだ。MPやHP、その他能力値に関する諸々の計算処理の科目である。

「あゝ。そのくらい対価無しでも教えるって」

俺が優しく苦笑しながら言うと、

「じゃあ別の対価をもらおうか」

「つけあがるなバカタレが」

出来上がったアイスティーにアーシェの魔法で氷を浮かべ、各員の前に出す。

俺自身も席に着き、斜め左に座るワルサーに問いかける。

「それで？ テストに関する情報って？」

2人も、俺の発言に賛同するようにワルサーを見た。

「ああ、実技試験の形態だ」

『!?!?』

驚いた。これが分かってしまえば、バトルボールに参加できる確率はうなぎのぼりだ。

「そ、そんなのどこで・・・？」

クウガがキョドるのも不思議ではない。だがまあその質問に関しては、俺とアーシェは“ワルサーだから”で済ませていた。

彼の所属する私立インクアイリ学園特別情報収集兼人為的流出用秘密諜報人員育成機関、略して文芸部の規模はかなりデカい。

総動員して動けばテスト問題を知ることくらいはお茶の子さいさいだろう。

「かなり助かるな」

「ソレ、ズルじゃないのかな・・・？」

アーシェは不安そうだが、ワルサーはにこやかに言い放つ。

「そんな情報を漏洩するほうが悪い！」

「そうかな・・・」

首を傾げるアーシェはさておき、次の言葉を紡がせる。

「それで？」

「ああ、簡単に言えば、タイムアタックだ」

『？』

「バーチャルルームが今回の試験会場。そこで現われるモンスター、“グリズリー”をいかに速く倒せるかを競うものだ」

グリズリー。簡単に言えばデスベアーの劣化版召喚獣だ。

とはいえ攻撃力は高く、何より体力は多い。タイムアタック以前に俺らのような異質でない、普通の生徒では倒される危険もあるモンスターだ。

「危険じゃないか？ この学年じゃ」

「確かに。んでも、まあ俺らにとってはそのほうがヒトと差がつき易くて好都合じゃないか？」

言われてみれば。納得する俺の隣で、クウガが意見する。

「それって、1対1でやるのか？」

「ああ、そうらしい。幸いバーチャルルームは特別教室棟にいくつもあるしな。1クラス1つのルームを使うことになるだろう」

「おお！ 熱くなってきたぜ！」

「でもま、筆記試験の翌日だけどね」

アイスティーのストローを加えながらアーシェが言う。その言葉でクウガは崩れ落ちた。

「まあとにかく。いい情報も聞けたし持つべき物は友ということで、勉強再開しますか」

「どうせだから晩飯、食ってけよ」

「お？
いいのか？」

夕暮れ時、そろそろ集中力が続かないこともあって勉強会はお開きとなった。

帰ろうとしたワルサーを引きとめ、比較的豪華な夕食の準備をする。

「ああ。幸い肉は大量にあるしな」

ニヤリと笑ってそう言うと、ワルサー也大いに感動してくれたようだ。

「焼肉か!!」

「おう!」

というわけで、4人掛けのテーブルをどかして、リビングの中央に竈を作る。皮袋から取り出したデカイ石どもが役に立った。

ついでリビングの窓を全開にする。程よく風が入ってきて気持ちがいい。

「飲み物買って来るね〜!」

アーシェとクウガが嬉々として1階の食堂へと向かっていった。あすこでコーラでも大量に買い占めるつもりだろう。

「明日テストなんだよな、こんな浮かれていいのだろうか」

置石を積みつつワルサーが遠い目をするが、

「まあいいじゃねえか。どうせここまで勉強すればテストくらいちよろいだろ？」

「・・・まあな」

2人して怪しい笑みを浮かべる。

今日はかなり勉強した。元々今回のテスト範囲くらいは沢山のフィールドでの経験が良い予備知識になっているので、知識系テストは余裕だろう。

あまつさえ計算問題系統は今日死ぬ気で教科書を一から解きまくった。

死角は・・・ない！

特にアーシェなんかはかなり筆記でも上位に食い込むのではないだろうか。

「さて、鉄板温めるか」

俺が言うと、ワルサーが魔法を唱える。

「ああ。fire easy grade first ファイアーボール！」

掌大の小さな火の玉が竈の中へと入り、中を明るく灯す。

「初級魔法にも詠唱必要なのか」

「アーシェちゃんじゃあるまいし。こっちが普通だよ」

今のは超初級魔法だとアーシェから聞いたことがある。

このくらい頭の中で想像するだけで詠唱しなくても発動できるというのが魔法使いの水準らしいが、

「まあワルサーはシーフだしな」

「そだな」

竈はワルサーに見てもらい、俺は肉を下ごしらえにかかる。

その内クウガとアーシェも大量のコーラを買ってきて、焼肉ムードが広がっていく。

「よし、できた！」

簡単に胡椒だけで下ごしらえを済ませ、リビングに肉どもを運ぶ。

『キターーーー！』

そんな声を受けながら、肉を次々鉄板に敷いていく。

ジュウウワアアアアア

肉汁の溢れ出す音が、食欲に一層拍車をかけ次々と箸で肉を取り合っていた。

「ふうううう。食った食った」

「ああ、美味しかったあ」

「熱いぜえ・・・もう食えない」

「相伴預かってよかったあ」

リビングに寝転がり、軽い食休み。体に悪いことは知っているが・・・こうしてたい。

戦場跡と化したリビングは散々たるものだった。

黒い水滴のついた紙コップが転がり、元は箸であった棒たちは適当なところに離れ離れ。所により肉カスが落ちていて、明日の片付けを考えると暗澹たる気分になる。

「ヤダ・・・髪に臭いがついちゃった。ユーヤ、シャワー借りるね・・・」

「ううい・・・」

けだるそうに起き上がり、アーシェはシャワーの方角へと歩いていった。

その数秒後。

「アーシェちゃんのシャワー・・・」

「おいワルサー、テメエ何を考えていやがる」

ぼーっと天井を眺めながら不穏な言葉を吐くワルサーを睨む。

「お前も信用されてるな・・・男の部屋でシャワーを借りるたあ・・・」

「あん？ いやまあ」

「ユーヤが甲斐性なしと思われてるかも知れんぞ」

声が震えていることから、笑いを堪えていることが窺える。おいクウガコルア。

「それか・・・覗いて欲しいとか、な」

「いやいやいやいやいやいやいやいや、アーシエをそんな女にするな！」

ワルサーの表情が、心ここにあらずといった感じだ。

「いやあ、分からないぜ？ 好きな男になら・・・ってな」

「ないだろ・・・」

そう言いつつも顔が熱いのが分かる。

ツツ、何だよもう。

サーっと、拡散された水が流れる音が聞こえてくる。

「な〜んか、動きたくねえな・・・」

「ああ、気だるい」

2人が口々に言うので、提案する。

「何なら今日、泊まってくか？」

「お？ いいのか？」

「やった〜・・・」

クウガは少し遠慮がちに聞いてきたが、ワルサーは気の抜けたコーラみてえな声で喜んでいた。

「まあいいんじゃないか？ 暑いし布団敷かなくてもここでごろ寝すりゃいいだろ？」

キュッと音が鳴り、シャワー音が止む。

「やった、ラッキー」

「ちょっと待ってな、脱衣所から枕くらいは持ってくる」

「う〜い」

「ほ〜い」

俺は立ち上がり脱衣所へと向かった。

「・・・なあ、ラブコメの予感しねえか？」

「ああ、だから敢えて指摘しなかった」

「ムフフフフ」

「ゲヘヘヘヘ」

そんな2人の会話の数秒後、悲鳴と、廊下まで魔法で吹っ飛ばされたユーヤと、顔を赤くしてバスタオル一枚で出てきたアーシェが見えたのだった。

「「予想的中♪」」

「・・・お前ら、気付いてて・・・ガクッ」

016 勉強会（後書き）

大変申し訳ありませんが、これから応募作品執筆兼ストックの作成に入りますので、3カ月間おまち下さい。

9月には再開いたします。ご迷惑おかけしますが、今後もしろしくお願いもうしあげます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9410s/>

探求部の冒険者な日常

2011年9月28日10時09分発行